
IS 福音のコア

朱赤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 福音のコア

【Zコード】

Z3579V

【作者名】

朱赤

【あらすじ】

テンプレでもらった才能は「ものを作る才能」、そしてあるものを作る権利だった。自分で作ったものの恐ろしさからそれを封印していた主人公。しかし、とある理由からその封印を解く。ヒロインはシャルロット。束には弱アンチかもしれないけどそんなにはしないつもりです。

エヴァはちょっとだけですので期待しないでください。

プロローグ（前書き）

はじめまして朱赤と申します。

作者は初心者ですので文が未熟です。
いろいろ指摘していただけると嬉しいです。
ただ非難だけは勘弁してください。

ではお世話しだすがどうぞ

プロローグ

初めまして、みんな。アルフォンス・アランだ。
フランスに転生した一般人で現在15歳。いきなり転生とか頭が
痛い奴と思われても仕方がない。しかし事実でな、元日本人だつ
んだよ。

転生前はめちゃくちゃ運が悪くてな。

生まれてすぐに親は死んじまつし、親戚中をたらいまわしにされ
るし交通事故に遭うこと3回、列車事故に遭うこと2回（もちろん
俺に非はない）、そのせいで左手は動かなくなるし、大学では卒業
研究で使うはずだった装置が火災で使い物にならなくなり、それの
修理で1年つぶすことになつたし散々だつた。死んだ理由も薬中つ
ぽいのに刺されたからだし、ホントまともじやない人生だつた。

死んだあと神様と名乗る爺さんに面会して聞いた話によると、ど
うやら自分に与えられた運のパラメータが本来俺に与えられるそれ
よりも圧倒的に低かつたそうな。運つていうのは生まれた地域によ
る部分があるらしく自分の運は問題レベルだつたらしい（それでも
世界的に見ればましらしいが）。

そんなわけで設定を失敗した謝罪に特典付きで転生させてくれる
ということで俺が希望したのは

1人間として生まれること

2ものを作る才能

3ある程度金持になれる程度の運

4「ピー」の長さを長めにすること
の4つだつた。

1番目はある意味当然だよな。昆虫とかになりたくないし。人間
よりもすぐれた種族がいて人間が蹂躪されている可能性もあるけど

それならそれで仕方ない。どんな世界に行くかは教えられないそうなので、少なくともこれを叶えてもらえば人間がいる世界には行けるしな。

2番目はどんな世界でも通用するものだ。人間がいる以上少なくとも道具は存在するし、なければ作ればいい……という建前だが、ぶつちやけこれは前世の装置修理がなかなかうまくいかなかつた腹いせから願つたものだ。それとあるものを作る許可をもらつた。それはもともと名前しか知らなかつたんだが、パチ屋（当然大あたりなんかしない）で見たときに興味が出て映画館まで見に行つたものだつたんだが、なかなかおもしろかつた。それで作つてみたいと思つたのだ。ただし呪いをかけられ、完全な状態は作れず中心部分しか作れないプラス成功作は1個だけしか作れず、2個目からは劣化品しか出来ないという制限をかけられた。これは仕方ないだろう。あのラストでは神様化して人類滅ぼしかけてたし、俺も大量虐殺がしたいわけじゃないしな。しかし中心部分だけで意味あるのかね？いや中心にあつ外部を自作すればいいのか。

3番目は2番目と関係する。金がないと物は作れない。才能があつても元手がなければ意味がないというわけで望んだ。

4番目は……うんすまない。カツとなつてやつた。今でも反省していない。だつて短かつたんだもの。小さかつたんだもの。ねえ？俺の願つたこと……俺の願望……そんなに間違つてる……？

ちなみになぜか神様は4番目だけ渋つていた。よくわからんが「全年齢」とか「ノクターンじやなくにじファン」とかわけのわからないことを言つていたけど、俺が25時間かけて「ピー」の長さに対する重要性の解説と説得をした結果「長いつてことは素晴らしい」という共通見解に至り、叶えてもらつことができた。

というわけで生まれてから15年。現在庭に建てられた小屋で生活しております。シンジ君状態ですよ。食事は用意してくれるから文句ないし、こうなつたのは俺が悪いんだけどね。6歳のときに新

しい理論を考えてノートにまとめたのを親に見つかったのが原因なんだ。本来なら遊びまわっている年齢で相対性理論の論文とか広げてまとめていたらいくらわが子でも気持ち悪いだろう。

前世の俺はあんまり頭は良くなかった。しかし転生後はなぜか異様に頭がよかつたのだ。多分転生した時につけたものを作れる才能が影響しているのだと思う。ものを作るのは奥が深い。パソコンを作ろうと思えばソフト面ではプログラムを組むし、ハード面では排熱のための空気の流れやパッケージ強度の計算なんかをする必要がある。

おそらくだが、ものを作る才能の内訳は理系の頭 + 手先の器用さなのではないだろうか。それにしても異常ともいえ頭の良さだが……

個人的に小屋暮らしさ氣に入っている。四六時中ものを作つても問題ないし、収納用に地下を掘り進める事もできるしな。友だち呼んで泊らせて家族に何も言われないっていうのも大きいな。友だちがこの？つてツツ ハハは無しだ。

一応学校には行つてるからそこでの友達ぐらいいるぞ。まあ一番遊びに来るのはクラスメイトじゃなくて「アールー！ あーそーぼー！」こいつだが……

「よつ、シャルいらつしゃい」

中性的な顔立ちとボーカルショウな雰囲気からショタにも見えるこの口リはシャルロット・ベルレアン。近所に住む5つ年下のガキンチョだ。

「今飲み物出してやる」

「オレンジジュースでよろしく~」

「遠慮ねえな」

これだけ来てれば遠慮もなくなるか。

シャルは最低週1で俺の家に来る。ただ遊びに来ることもあるが今日の日付を考えると心細くなつたんだろう。

こいつの母親であるイレーヌさんは通院している。詳しい病名は知らないが結構頻繁に行つてゐるみたいだ。シャルとの縁もイレーヌさんがらみだ。去年散歩中にイレーヌさんが倒れていたのを助けて病院まで連れて行つたのが出会いだつた。シャルはオロオロしていただけだつたが仕方ない。目の前で母親が倒れて冷静に対処できるチビッ子などいたらお手にかかりたいものだ。

そんな出会いから1年。シャルはイレーヌさんが通院するたびに俺の家に来る。父親はいならしいし、イレーヌさんも病院には連れて行かないそうだ。10歳だし家で留守番ができないこともないだらうが寂しいのだらう。

「ほりよ。オレンジだ」

トレイにコップ2つとスナックを乗せてテーブルまで持つてくる。

「わーい、このオレンジジュースおいしいんだよね
「それなりにいいの贋つてんしな」

ちなみにこのジュースからテーブル、果ては地下の拡張費用まですべて株で稼いでいる。

親に最初の資金だけ借りて株をやってみたら大当たり。資金もしつかり利子をつけて返し今ではかなりの資産と化している。ぶつちやけ両親とは比較にならん程稼いでる。

「んで今日は何するアーマー・コア?・ギルティ ア?・デ モン?
それともモンド・グロッソのビートオでも見るか?」

これらはシャルが得意とするものばかりだ。とつつきにスレイ
ーにロードナイ モンだ。

シャルはこの一年でかなりのゲームーと化している。いやあ調き
ょゲフングゲフン、教育したかいがあつたなー。

モンド・グロツソつていうのはISの競技会のことだ。ああ、IS
について説明を忘れていた。はつきりいってこれは生まれ変わつ
たこの世界の最大の特徴といつていい。

インフィニット・ストラトス 通称IS
篠ノ之東博士が開発した宇宙空間での活動を想定し、開発された
マルチフォームスースだ。

今から5年前に発表されたのだが、その時は見向きもされなかつ
た。しかし1月後に起きた白騎士事件により事態は急変する。世界
中のコンピュータが一斉にハッキングされ2000発を優に超える
ミサイルが日本に向けて発射されたがその約半数を「白騎士」と呼
ばれるISが迎撃。その後「白騎士」の力を重く見た各国がこれの
捕獲、もしくは撃破しようと戦力を日本に送り込んだが、これをま
た迎撃されてしまった事件だ。このときの死者は皆無ということにな
なっている。

ちなみにこの死者が皆無というのは真実でもあるし誤りでもある。
ミサイルの撃墜に関してだが先ほども述べたように約半数しか白
騎士は落としていない。となれば落とされなかつたものもあるわけ
で、それが爆発して発生した高波などの二次被害では僅かながら海
岸線沖の集落が巻き込まれ死者が出た。同様に各軍迎撃では白騎士
が落とした戦闘機のパイロットが戦闘に巻き込まれフレンドドリーフ
アイアで亡くなっている。つまり白騎士が手を下していないという
意味では死者はいないが、事件全体では死者がいるのだ。

つかこれ自作自演だよな。この事件で得したの東博士だけだし
……

だけじゃうするとわかんないことがいくつあるんだが……まあいいや。

話がそれたな。

そんなわけでISの有用性が示されたわけで国防の主力になつていつたわけだが、このISという名の武力のカードを見せ合い「てめえ俺んとこに攻めてきたらいでこますぞ」という圧力をかけるため昨年に開かれたのが「モンド・グロッソ」だ。

一応競技の形は取つてはいるけど、見る人が見れば戦争の縮図だらあれ……あれ……

「ゲームもいいけどまずは地下のあれ、見たいな」

「あれ見てそんなに面白いか？ 一応完成してるけど動かないんだぞ？」

「うんー」こに来たらあれ見ないと来た気がしないよー。」

シャルのテンションがつなぎ登りなので地下に行くことにした。俺以外に地下に何があるのか知つていいものはほとんどない。知つてているのはシャルとシャルから話を聞いて見学に来たイレーヌさん、男のロマンが分かる友人數名だ。

地下には冷蔵庫を模した隠し梯子を降りていかなければならぬ。まさか冷蔵庫が隠し梯子になつてはいるとは誰も思つまい（普通の冷蔵庫もあるぞ）。

地下はいくつかの階層に分けてある。

一番地上に近いエリアは工作スペース。そこまで広くなく簡単な機械とかならここで作る。両親はここまでしか知らない。

シャルが見たいのはそこからさらに階段を下りた秘密スペースにあるものだ。秘密スペースは非常に深いところまで自分で掘つて作つた。掘る機械も自作だ。多分普通の建築物なら地下5階相当だろう。建築法？ 何それオイシイの？ 特殊なコンクリで天井を支えて

いるから崩落の危険性はない。

数分かけて階段を下りていくと扉が見えた。この扉は俺しか開けられないようにはパスワードが設定されている。たとえシャルや友人たちがこの中にあるものを運び出そうとしてもここで足止めを食らうわけだ。この内部にあるものはそれだけ危険だということでもある。チープな電子音が解錠されたことを告げる。

扉があくと同時に俺たちを感知し電気が一斉に付く。

内部には『黒』が鎮座していた。

人型のそれは、まるで騎士が王に頭を垂れるかのごとく膝をつき動かない。

シャルがトコトコと駆け足で『黒』へと近付いていく。

「『黒騎士』は今日もかつていいね」

鎮座するそれを触りながら褒めるシャル。その光景は騎士に褒美の声をかけるお姫様のように見えた。

この『黒』こそ俺が作り上げたパワードスーツ『黒騎士』

ISが発表されるのと同時に完成したこれは、おそらく永遠にここから出ることはないだろう。

理由は3つ

1つ目は白騎士事件だ。おそらくこれを表に出せばこれは兵器として扱われるだろう。それだけの機能がこれには付いている。名前も現存する何よりも強かつた白騎士を皮肉つたものだ。

2つ目は性能面。理論上とはいえ現存するIS以上の性能を有す

「こいつはこじから出したくない。出さないと決めた時から調子に乗つて改造を繰り返したためにさうに出せないものになつたしな。

最大の問題は3つ目。

「だけど残念だよね。これを動かすコアがないなんてさ」

そうこれが最大の理由。こいつには核がない。胸元にぽつかり空いている穴に核が嵌まるようになつてているのだがその核がどうにもできなかつた。

「まあ仕方ないよね。EISコアなんて個人じゃ手に入らないもん」「そりやあな。束博士ぐらい頭良けりや自分で作れるんだろうがな」「前に製作に失敗したんでしょ。そこまでは期待していないよ」

シャルには俺がコアの製作に挑戦したがあきらめたと話してある。

「じゃあ上にもどろつか。今日はGGの気分～」

「はいはいわかりましたよ。お姫様」

「なにそれ」と微笑むシャルを連れてスペースを後にする。

俺たちがスペースからいなくなつたことで再び黒騎士は闇の中に戻される。

俺はシャルロットに嘘をついている。

『アがないのではない。製作に失敗したのでもない。作つていないのだ。

シャル達にはこれはISだと教えた。だがこれができたのは発表とほぼ同時期。
これがISのはずはないのだ。

秘密スペースのさらに奥に存在する俺しか知らない極秘スペース、そこはコアの作成用スペース。
機材があり、ほとんどの材料もそろっている。

だが重要なものがない。

あれを完成させたとき俺は悪魔と呼ばれるだらう。

俺は知らなかつたのだ。アレにそのようなものが必要だつたなん
て……

開発コード『ヒュアンゲリオン・コア』

俺が望み叶えてもらつた1個だけ作れるもの。
その恐ろしさに製作を放棄し封印したもの。
『人の魂』を封じ込め完成する悪魔の発明。

その封印を3年後俺は自分の意思で解くことになる。

プロローグ（後書き）

白騎士事件は私の想像です。

戦闘機相手にして死者なはないんじやないかなと思い改変しました。

このことは展開に特に影響ありません。

シャルのファミリーネームとか母親の名前は勝手につけました。
多分公式では出ませんよね。

修正情報

モンド・グロッソの開催年を変更

ISVSに関する情報を消去

私の勘違いでモンド・グロッソの開催は4年だと思っていたために時系列がおかしくなっていました。

あとISVSって第一回のモンド・グロッソのデータなのでこの時点では存在しないため修正しました。

束アンチはあと1・2回の予定です。

感想で主人公の倫理観が腐っているといわれました。

私の文章能力の低さからそのように感じ取られたのだろうと思いました。

主人公は魂が必要になると知らない設定でした。

そのため作ったけど封印した設定でした。

ですがわかりにくかつたのでコアについて詳しくない（パチンコと新劇場版）でしか知らないということ、作成を放棄したという設定を加えました。

第1話 そして俺は悪魔となる（前書き）

プロローグのPVが約1600件 ユニークも500件を超え、お気に入り登録していただいた方もいらっしゃりそんなにもたくさんの方々に見ていただき大変うれしく思います。また同時にビのつよに思われているかも気になり戦々恐々としております。

それでは第1話をよろしくお願ひします。
ちょっとキンクリしてます。

第1話 そして俺は悪魔となる

特に代わり映えのしない日常を延々と繰り返し3年が経った。特筆すべきことがあるとすれば飛び級で大学に進学しもつすぐ卒業というぐらいだな。

うんチート頭脳だな。

俺はその日ある人を待っていた。

彼女が一人きりで話がしたいと一昨日電話をしてきたため、地元から離れ遠くの大学へ進学していた俺は急遽休日を使い実家へと帰ってきた。

電話ではなく会つて話がしたいそうだ。

私室ならぬ私小屋にて彼女を待つ。

呼び鈴が鳴り扉をあけるとその人物が立っていた。

「お久しぶりです、イレーヌさん。中へどうぞ」

そう、俺が電話貰つた人物はシャルロットのお母さんだった。彼女は年々やせ細つていて、おそらくは病気のせいだ。出会つたころから顔色が良い日は少なかつたが、それでもここまでではなかつた。

お互に一口カップに口をつけた後に切り出されたのは謝罪からだつた。

「『めんなさいね。急に呼び出したりして。本来なら私がそちらに伺うのが筋なのに……でも御医者様に遠出を止められてしまつているの』

「やはり体調が思わしくないのですか」

俺の口調がおかしい？ そりゃ年上と話してんだ。敬語にもなるだろう。

「ええ、あと1月持てばいいほうじゃ」
「なつ……」

俺は言葉を失つた。良くないとは思つていたがそこまで進行して
いたとは……

そんな俺の様子をしり目に彼女は言葉を続けた。
「それでね、今日時間を作つてもらつたのはシャルのことでついて
お願いしたかつたからな」
「まさか俺に育ててくれとこつわけではないでしょ」
「ね」

確かにシャルは大切な友人だ。だがそこまで責任は持てない。金
の問題ではなく俺はまだ他人の人生を支えてやれるほど成熟してい
ない。

彼女は一瞬キョトンとした後、「さすがにそこまでお願いはしない
わよ」とくすくす笑つて答えた。

「でもそれもいいかもね。シャルのことお嫁に貢つてくれないかし
ら？」
「やめてくださいよ。まだ結婚できる年齢ではないですし、第一シ

ヤルがいいと言つわけないでしょ」

「あら、将来シャルがいいと言つたら結婚してくれそうな言い方ね」
「異性というよりもどちらかといえば妹ですよ、それにあいつだつ
て俺のことを兄みたいなものとしか思つていないのでしょうし。この
前だつて無警戒に抱きついてきたりしてきましたしね。男と思つて
たらそんなことしないでしょ」
「う」

ジョーク交じりの提案に、こちらも茶目っ氣をもたせて答える。たまにこちらに戻つてくるとシャルは俺に会いに来る。そつきのは前回戻つてきた時の話だ。抱きつかれたときに胸が当たつてちょっとだけドキドキしたのは秘密。何気に胸あるんだよなあいつ。ちなみに欲情はしなかつたよ。俺はロリコンではないからな。最近色気づいてきたのかスカートが短かつたり、露出が以前よりも多くなつてたりして、お兄ちゃんは悲しいです。

「脈がないの？ でもシャルに聞いた話だと顔が赤くなつたつて話だし…… もつと直接行かせるべきかしり……」

なんかイレーヌさんがブツブツつぶやき考え出してしまつた。小声でよく聞こえないがなぜか良くないことの脈がする。

「それで、改めて聞きますよ。俺にお願いって何ですか？」

深く考え込ませてはいけない、といつ俺の勘に従い今日の要件へと話を戻す。

「え？ ああ、うん、そうね。あなたへのお願いは、たまにでいいからシャルの話し相手になつてほしいの。会えないなら電話やメールでもかまわないわ。お願いできないかしり」

そのお願いを聞き、そんなことかと思つた。正直今までと変わらない。たまに帰つてきてシャルに会つてついでにこれまでと同じだ。しかしそれは間違いだつた。

「シャルをあの子の父親に預けることにしたの」

シャルから父親がいないといつ話を聞いていたのでてつきて「へなつてているものだと思つていた。シャルが生まれる前か小さな頃に離婚でもしたのだろうか？」

「あの子の父親の名前はエリック・デュノア。デュノア社社長よ。再び言葉を失つた。そのあまりのビックネームに。」

デュノア社

第2世代ISの完成系といわれる「ラファール・リヴィアイブ」を発表し今や世界シェア3位の大企業だ。

「ということは、イレーヌさんは社長夫人でシャルは令嬢だと?」「つづん、彼とは一晩だけだしすでに奥さんがいたわ。だから愛人と妾腹の子が正しいわね」

病や薬でボロボロだが、今でも十分美人だ。手を出したくなる気持ちもわからなくはない。しかしこれが表沙汰になれば結構なスキヤンダルだな。

「私が子供を産んだのは彼も知っていたわ。認知はしてくれなかつたけどね」

うわ、やり捨てとはまた……

仕方ない部分もあるのかね。相続の関係とかあるだろ?が……

社交界はわからん。

昼夜ドラレベルでドロドロしそうだ。

「この前彼に会いに行ってシャルのことをお願いしたわ。彼はシャルがデュノアの資産を相続しないことと本邸ではなく別邸に住ませること、IS適正次第ではテストパイロットすることを条件に引き取ると言つてきたわ」

奥さんには思いつきり殴られたけどね、とその時のこととを「冗談めかして話してくれた。

「だからあの子の味方になつてあげてほしいの。ここを離れてただ一人遠く力になつてくれる人がいない場所に行くあの子の味方に。あなたの声を聞くだけでもきっと安心できるから。それ以上は望まないから。どうか、どうか……」

その弱弱しい懇願に答えは簡単だった。

「わかりました。可能な限りあの子の、シャルロットの力になります」

それ以外の答えはなかつた。俺だつてあの子のことは大切だ。今までのようにしてやろうと思つ。そのうち向こうで大切な仲間ができればいいと思う。それまでのつなぎ役だな。たしそいつが男だつた場合殴りに行く。なんか腹が立つから……」

俺の答えに「ありがとう」とイレーヌさんが弱弱しく満足そうな顔をする。

それを見てふつふつと俺の中にある感情が沸き起つてきた。

「それでいいのかよ」

「え？」

それは怒りだつた。

シャルのこれからが一応形になつたことで安心したのはわかる。

「それであんたはいいのかよ！」

聞いてはいけないことなのだろう。

だが聞かないといつことを俺はできなかつた。

「あんたは本当にそれで満足してるのでよ……」

そう満足そうな顔をした。

それはつまりまだ心残りがあるということ。

「あなたはまだしたいことがあるんじゃないのかよ！」

俺は無茶で残酷なことを言つてゐる。彼女に未来を夢見ろと言つてゐる。

だつて、きっと彼女の本当の願いは……

一瞬の衝撃のうちに俺は吹き飛ばされていた。

左頬が熱い。イレーヌさんが右腕を振りぬいた姿勢で立つていた。

「あなたに何がわかる！－！」

それは怒号だつた。絶叫だつた。そして弱音だつた。

「私だつて本当はシャルと一緒にいたいわよ！ シャルのウエディングドレス姿を見てみたい！ シャルが産んだ子をこの手で抱きたい！ シャルといっぱい話して悩んで喧嘩して仲直りして、そして笑つていたかつたわよ！ だけどそんな当たり前でちっぽけな願いだつてもう叶わないじゃない！－！」

その姿は先ほどまで見せていた弱弱しい姿とは似ても似つかない。

「あの子にしてあげたいこと！？ いっぱいあるにきまつていじやない！－！ だけど私はもうシャルを育ててあげられない！ だつたらあの子のためにできることは何！？ 賴れる人を頼るしかないじゃない！－！ 恥を忍んであの男にも頭を下げにいつた！－！ 本妻に泥棒猫と罵られ頬を叩かれ生ごみを頭にかけられても必死で頭を下げたわ！－！ 私にはもうそれしかできないから！－！」

彼女の願いは予想と寸分の狂いもなかつた。

予想外があつたとすれば彼女の姿だつた。

余命1月と宣告され身体機能の衰退も著しいといつのに、はいて
いる言葉は弱音でしかないといつになんと力強く偉大な姿なのだ
らつ。

そつか

これが『母親』か

「シャルがうらやましいな」

ぱつりと漏れた一言にイレーヌさんの剣幕が収まる。

素直にそう思つた。俺の両親は前世じやいなかつたし、今は不気
味がつて隔離するような人間だからな。ここまで強く思つてくれる
母親を持つシャルに少し嫉妬してしまつた。

「少しついてきてください」

その返事も聞かず俺は地下のエリアへ潜つていく。目指すのは秘
密スペースのさらに奥、極秘スペース。極秘スペースにはさまざま
なものが置かれているが、それらはあれを作るためのものに過ぎな
い。

『エヴァンゲリオン・コア』

黒騎士の核にして人の魂を封じ込める悪魔。

極秘スペースの隠し扉を開けようとして一瞬だけ逡巡した。

本当に作つていいものかと、JICOを封印した理由を思い出せと。その答えはすぐに出た。

「それがどうした」

悪魔と呼ばれるなら呼ばれよう。

彼女の願いはそれだけの価値がある。

まぶしく見えるだけ、気の迷いかもしねない。

それでもあの一撃に込められた力強さ、言葉に込められた意志はきっと尊い。

「これは俺の意思だ。

同情などではなく」のコアは 福音の名を持ち、愛情をもつてつながるあのコアは彼女にこそふさわしい。

視線を背後に移す。そこには膝をついている黒騎士がいた。コアだけでは不十分だ。黒騎士とともに運用することですべての機能が使えるようになる。コアも持ち運びには不便なサイズだし量子化機能を起動させるためにも取り付ける必要がある。まさかこいつを外に出す日が来るとは思つていなかつたな。

俺についてきていたイレーヌさんはどこか申しわけがなさそうだつた。時間が立つて頭が冷めたのだろう。

「えっと、アルフォンス君。ほつぺた大丈夫? さつきはちょっと

頭に血が昇つて「イレーヌさん」……なにかしら

俺の様子に何かを感じ取つたのだろう。何んまいを直して向かいあつてくれた。

「あなたは自分の願いのために悪魔に魂を渡せますか？」
シャルと一緒にいることはできる。話すこともできるかもしない。

でもそれ以外のことはなにもできなくなる。

それでもあなたはシャルと一緒にいたいですか？」

答えは即答だった。

「当つ前よ。私はあの子と一緒にいたい。そのためだつたら神様でも悪魔でも何だつて利用するわ」

俺はその答えに、隠し扉のパスワードを入力する

『EVANGELION』

数年ぶりに開かれたその部屋に一步足を踏み入れ、振り返る。

「なら俺に魂をください。あなたの願いを叶えさせてください

そして俺は悪魔となつた。

その一週間後、イレーヌ・ベルレアンは消息を絶つ……

たつた一つのペンダントを残して

第1話 そして俺は悪魔となる（後書き）

この作品本当は神様転生の予定ではありませんでした。

原案では天才少年がシャルのために第3世代を作るというのがテーマだったのですがまとめている間にこの母親を死なせたくなくなつたというのが変更の理由です。

じゃあどうするかということを考えていたときにエヴァの破がロードシヨーでやるという話を見て「そういうやこれも母親いねえな、コアとかもあるな」とか思つたときに考えつきました。

母親を助けられないなら「コアに入れればいいじゃない」と

コア設定だけだとちょっとさびしいから機体のほうもエヴァで何とかしてやれと思い黒騎士にもエヴァ要素を取り入れてあります。

だけど予定では黒騎士活躍するのかなり先なんだよなあ

次回はシャルが主役。というかこの作品はこの先オリ主よりもシヤルが主役です。

第2話 お前のよ^うな奴にシャルはやりん(前書き)

予定では第三世代実験だったのですが変更でその前日のお話です。シャルが主役になるのを期待していた人ごめんなさい。もう少しだけ待つてください。

第2話 お前のような奴にシャルはやらない

「へえ、じゃ明日はデュノア社の第三世代モーテル試作機に乗るんだ『うん、イギリスのティアーズモーテルと同じBT兵器搭載型らしいよ。だけどあちらと違つて、ほぼ自立動作するようになつてるみたいだね。ホントは企業秘密だから教えちゃいけないんだけどね』

「だから、秘密だよ?」と可愛らしく付け加えられた。

電話の相手はシャル。

1週間に1度の電話は習慣とかして1年になつた。

毎週日曜にシャルが電話をくれる。時差が半端じゃないからお互いに時間がとれる日曜に話すことが多いな。毎週シャル側からかけてくる。電話代とかが馬鹿にならないから俺からかけると言つてゐるのだが、なんでも「アルに任せると忘れそう」との理由であちらからかけてくる。妥協案としてコレクトコールでかけさせているがな。

「自立動作ができればBT適性もあんま関係ないしな。操作性の面でイグニッショングランでも優位に立てるかもしないな。問題はパターン化する部分が多いことで見切られやすくなつてしまつところかな」

『おお、さすがIIS学園整備士兼教師だね。もう問題点を見つけるだなんて』

「茶化すな。どうせそっちだつても『これくらい気付いてるんだろ。』とか、『気付いてないと不安な』ことの上ないんで気付いていてくださいお願いします!』

「あはは」とシャルの笑い声が電話から聞こえてくる。この声だ

けで後1週間は頑張れるよ。

さつきの話にも出ていたが、俺は今ＩＳ学園に勤務している。

ＩＳ学園とはＩＳの操縦者育成機関だ。

ここでは世界中のＩＳ運用協定参加国から生徒が集まつてくる。ＩＳ学園の倍率は世界中から受け入れをしているため「冗談のよう」な数字となるので、ここに入学するだけでエリートといつても過言ではない。

そして教師陣もそれに伴うレベルの高さが求められる。

俺の場合、ＩＳの機動性に関する新理論を提唱した卒業論文が秀逸だったとのことで国際ＩＳ委員会に提出され、それがＩＳ学園のお偉いさんの目に留まつたことで直々にスカウトが来た。株と開発特許で起業して生活しようと考えていたので特に就職先がなかつた俺は、それなりにいい待遇に惹かれてその話に乗つた。気ななることを調べるためにもここはちょうどよかつたしな。

そんな経緯があつて日本で教鞭をとつている。教員免許は持つていない。ＩＳに関する授業を受け持つ際には教員免許は必要ないのだ。代わりにＩＳに関する試験を受け、資格を取る必要がある。

これはＩＳ知識が専門的すぎるため、これまでの物理学や機械設計とは大きく異なるので一般の教員に教えることができないことが最大の理由である。

一応試験には教育に関する項目もあるため、まったく無知というわけにもいかないが。

もちろんＩＳ学園で数学など普通の教科を受け持つ際には日本の教員免許が必要だ。ＩＳ学園は基本的に日本の法律が適用される。なかば治外法権ではあるが日本が運営していることを考慮している。そのため日本の資格が優先されるようになつてている。一応諸外国の資格も通用するが、こちらは大量の申請が必要らしい。

それにしても第三世代ね……

「だが急すぎるな。ラファール・リヴァイブだけじゃやつていけないのはわかるが開発期間が短いんじゃねえか？」

技術の進歩はすさまじく早い。特に出始めてから10年しかたつていないものなんてあつという間に進化する。ラファール・リヴァイブは第一世代最終期のものであるために完成系といわれるレベルだが、第三世代の開発が進んでいる昨今では「まだ通用する」でしかなくなつてきている。

『うん。時期尚早つて声もある。だけど武装部門が焦つてるみたい。最近フランスのカリ工社がエネルギー効率が高いレーザーライフルをはじめいくつかの新型兵装を開発して売り上げに影響が出そつて話だよ』

や、やばい。多分それ俺が開発したものだ。

昔開発してほつたらかしにしてた設計図を就職祝いとして黒騎士を知る仲間に渡したんだ。たしか就職先カリ工社つて言つてた気もする。

現在有る武装の改善案をまとめたものだつたからいかなと思つたけどまさかこんなに早く開発できるとは思つてなかつた。あれには俺が個人的にまとめた複雑極まりない理論とか使つてたし開発にはあと数年かかると踏んでいた。

「ま、怪我だけはすんな。女の子なんだから嫁の貰い手減るぞ」

『そつ、そうなつたらアルが貰つてよ…』

『こきなり大声出してどうした。確かに俺はそんなこと気にしないが……つうか手頃なとこで妥協しようとするな。きっとお前が好きになる奴はそんなつまらないことを気にするような小さい男じゃねえよ』

『うん確かに気にしなさそうだね』

その時俺に衝撃走る

「シャル……好きな男がいるのか……」

『え、あ、いや、そうじゃなくて』

「安心していいよシャル。俺はシャルの味方だから。ダカラオレーリソイツノナマエトジユウシヨヲオシエロ」

『なんかすごい声が怖いよ！ ていうか教えたたら何するつもりなの！？』

「現在心中で戦っている天使と悪魔の決着次第だな。悪魔が勝つたら家にグレネードランチャーぶち込む」

『天使勝つてえ！！！』

「天使が勝った場合、まずはそいつを「検閲削除」して「検閲削除」したあとに「検閲削除」させてから「検閲削除」だな」

『天使のほうがひどい！ もうわけがわからないよ！』

「現在シャルの声援のおかげで天使が優勢だ。ダカラサツサトオシエルンダ」

「ますます教えられないよ！ 安心して！ 私と仲がいい男の人はアルだけだから！！」

「嘘はつかなくていいぞ。シャルはかわいいんだから男なんて向こ

うから寄つてくるだろ」

返事がない

「シャル？ シャル聞こえてる？」

『かわいい……かわいいってアルが……』

ブツブツ聞こえるがうまく声が拾えていないのか、何を言つているのかは聞こえない。

「おーい、シャルさんやーーー！」

『へつ？ あ、ゴメンね電話の最中に』

「いやいいんだ。だからその男の『ホントにアル以外にいなから大丈夫だよ』そうか」

付き合いも長いし冷静になれば嘘を言つてはいるがぐらいならわかる。しかしながらさつきはあんなに暴走したんだろうかね？

なんかこう、シャルの隣に男がいることを考えただけでそいつを去勢してやりたくなるんだけどどうしてだ？

あれかな。娘を取られる父親の気分みたいなもんなのか？

そのあとは他愛ない話をした

俺が開発したプログラムを学園の打鉄に入れたとか
フランスに帰省しようとしているとか

シャルがかわいい子猫を見つけたとか
アンノウンのアクアラビリンスでバルバースをノーダメクリアしたとか

『でもここに話をした

『そろそろ明日のために寝なきや』

「そうだな。万全の体調で挑んだほうがいいな」

寝不足で事故ったとか話にならない

『じゃあね。また来週「あ、待てシャル」なに』

これだけは言つておかなければ

「明日の起動テストするときにあるのペンドントだけは絶対につけて
おけ」

『ペンドントつけるのが残してつたやつへ』

「ああ、おまもつにな。あとと無事に終わらせないとができるはず
だ」

『うそ。アルがそうこうんだつたりつけておくよ。それにしてもお
母さんどこに行つちやつたんだろうね?』

俺はその質問に答えられなかつた。

本当のことは言わないと約束してしまつたから。

『せめて、ちゃんとした葬儀ぐらいしたかつたんだけだね。行方不明じややつもいかないし……』

彼女は行方不明ということになつてゐる。しかしシャルも当時イ
ーラスさんが余命幾ばくもないことを知つてゐた。だからもう七
なつてゐると思つてゐるだらう。

実際イーラスさんは生きてゐると言つてくつゝ状態だ。

「そうだな。だがとにかく明日だ。気をつけでな」

『うん、アルもね』

またねと言われ電話が切られた。

「さて、じゃあ次は……」

俺はパソコンの電源を入れ、あるアプリケーションを起動する。イヤホンマイクとカメラをつけ準備が完了。

「イレーヌさん、起きてますか？」

「ええ起きているわ。さっきの電話も聞いていたしね

開いたウィンドウにはイレーヌさんが映っている。このアプリケーションは肉体ごと魂をコアに封じ込められたイレーヌさんとの通信を行うものだ。

イレーヌさんに話を持ちかけた後、急ピッチ（それでも一週間）でコアを作成したのち、俺はいくつかの改造を施した。

一つは通信機能。

精神的に生きていても何もすることができなければ退屈だらう。せめて話ぐらいいは、と思い組み込んだ機能だ。

本体たるE・コアエヴァンゲリオンとそれの複製たる劣化コア間で情報バイパスを形成することで、劣化コアを組み込んだ通信機（この場合俺のパソコン）と情報のやり取りができるようにした。

一つ目に休眠機能。

人間でいえば睡眠にあたる機能だ。

彼女は今ほぼコアのソフトといつていよい状態だ。

このように機能として組み込まなければ彼女は覚醒したまゝとなる可能性があつたし、休眠したまゝというのは彼女の願いに反するため彼女の意思で休眠できるようにした。

この二つの機能を着けるためにコアを製作してから一週間の時間を要した。

コアに彼女を取り込む際肉体まで消失してしまった。これは予想外で肉体はシャルに何とかごまかして返そそうと思っていたのだ。そしてコアに彼女が入つて驚いたことはコア内部で彼女が生活しているという点だ。

てつくり魂という情報として内部に入ることになると思っていたが彼女の主觀では肉体があり活動しているらしい。もし彼女の肉体が病気のまま取り込まれた場合どうなるかわからなかつたが現在彼女の体調に問題はないそなうなので胸をなでおろしている。

ここで推測されたのが魂を取り込むにあたり、コアが彼女の肉体というアウトフレーム情報を欲したのではないかということだ。つまり内部空間で行動するに当たり形骸が必要であるためその構成のために取り込まれた。よつて外見情報しか影響せず、病気などの情報は取り込まれなかつたのではないかというのが俺の考えだ。だが気になるのが取り込んだ時点よりも美人となつている点だ。病気をせず健康だったらこうなつたんじやないかとも思う。もしかすると魂情報とアウトフレームが相互依存して本来の姿になつているのかもしれない。

シャルを成長させて母性を持たせるところなるんじやないかと思える外見でたまにドキドキする。

「だけど本当によかつたんですか。あなたがペンダントの内部にいることを教えないで」

「いいのよ。あの子が親離れできなかつたら大変でしょ。それに前にも言つたぢやない。私はあの子といられるだけで十分なの」

そう、シャルに明日の実験に持つて行くよつて忠告したペンドアン。そこ黒騎士の待機状態、つまりイレーヌさんの魂の入れ物なのだ。ノアに入る際にイレーヌさんは自分のことを教えないようにと俺に頼んだ。自分の存在がシャルの成長の妨げにならなによつこと。彼女の願いに反する頼みに俺はどうするか迷つたが、一緒にいられるだけで十分と言われ、いまだにシャルには教えていない。

「どうひでシャルに好きな人がいるみたいなんですか知つてます？」

先ほどの電話で氣になつたことを聞いてみる。

シャルは自分の周りに男はいないと言つたが、どうにも「気になさそう」という発言が気になるのだ。仲よくしていなだけ遠くから見ているだけの片思いとかの可能性もあるし、最悪ヨリに走つた可能性も無きにしも非ず。できればノーマルのままでほしいものだが。

「私からは何も言えないわね、つてちょっとまつて。フランス行きのチケットを予約しないで、デュノア社の男性名簿とかハッキングしないで！」

「今の答えは好きなやつがいるつて認めてます！そして俺には前から決めてたことがあるんです。シャルに大切な男ができたら一発殴つてやるんだつて！」

「さつきはそれと比較にならないくらいスゴイ」と言つてたぢやない。それに殴るのは止めておきなさい。奇妙な光景になるから」

奇妙な光景つてなんだ？

「安心しなさい。あなたが考えているようなことじゃないから」「どつかの誰かに片思いとか、同性愛に走ったとかではないんですね」

「違うわよ」

なんかイーレースさんが疲れてるみたいだけど大丈夫だろ？

「まあそれならいいです。とにかくほしいものとかあります？」「いえ特には「イーレースさん」……前に送つてもうつた小説の続きが見たいわね。その他は大丈夫よ」

内部空間はある程度じゅうぶん自由に変化させることができるようにになつた。

造形機能とでもいづべきか。

この機能で小さな一軒家を作成し今ではイーレースさんはそこで生活している。

またこのパソコンに組み込まれている劣化コアから本体に量子交換で物を送れるようになったのはつい最近だ。量子化したものは内部のイーレースさんが自分の手元に呼び出せるみたいでこの前冗談半分で小説を送つたら読めたそうだ。

コアの中で彼女は暇そうだったので数冊の書籍を送り退屈しおぎにしてもらつていて

彼女は遠慮することが多いのだが、小金持ちの俺に懐具合は気にしてもらわなくて大丈夫だし、こんなとこに閉じ込めてしまつている負い目もあるから遠慮などしてほしくないのだが。

無理を叶えさせてしまった彼女と閉じ込めてしまつた俺。お互に負い目があるからちょっとばかり変な関係だ。

「じゃあ数日中こおくつますね。それと明日第三世代の起動実験だそうですね」

「ええ。少し不安があるわ」

「最悪の事態になつたら助けてあげてください。それくらいならいいでしょ」「うー」

「そうね。どこまで起動してもいいかしら?..」

「ジーンもしくは部分換装システムから、最悪の場合完全換装まで行きましょう」「うー」

俺が提案したのは黒騎士の武装と展開システムだがこれには色々と問題がある。使わないに越したことはない。

「起動したものはすぐに俺に教えてください。いろいろやることがありますので」

「わかったわ」

起動実験、無事に済んでほしいもんだ。

俺の願いむなしく起動実験は失敗に終わることとなる。

第2話 お前のよいうな奴にシャルはやらい（後書き）

次こそシャルが主役です。
実験はどういうに失敗したのか?、その時黒騎士は?
そんな話になる予定です。

第3話 特殊武装「ジーン」（前書き）

皆さん、こんにちは。作者の朱赤です。

なんとこの作品、総合PV10,000突破　ユーチューブ2000人突破　日間ランキン51位となりました。

見た瞬間、思わずパソコンのディスプレイにお茶を吹きかけてしまいました。

これも皆様のおかげです。

今後とも精進していくつもり思います。

第3話 特殊武装「ジーン」

第3話 特殊武装「ジーン」

アルと電話した翌日私はデュノア社試験場にいた。理由はもちろん第三世代試作機タンペットモデルの起動試験。

一人称がおかしい？ なにいつてるの？、「僕」や「俺」は男性、「私」はどちらの性別でも使うって聞いたよ。

そういえば今世界の共通語つていうと英語と日本語なんだよ。

10年前までは英語だけだったらしいね。

なんでも篠ノ之東博士が論文から発表まで日本語でしたうえに英語とかの質問に一切答えなかつたことからちょっとずつ日本語が広がつてつたんだって。

それにI.S開発初期には日本が情報を独占したり日本にI.S学園があつたりするのも影響しているんだ。

いま世界がI.Sで回つてていると言つてもいいことを表している一例だね。

だから私も日本語を勉強してそれぐらいのことは知つてるよ。

それにしてはしゃべり方が男っぽくないかって？

それはアルのせいなんだ。

最初はアルに日本語を教えてもらつたんだけど、いきなり口語から教えられたんだ。しかもアルが男性風の口語を教えてきたからこんな風になつちゃつた。

最初は一人称も「僕」だつたんだけど学校で教えられて直したんだ。

口調はあきらめた。何度も直してもうまくいかなかつたから。長く教えられるとそれが染みつっちゃつてことを学んだよ……

アルに「何でこんな風に教えたの?」って聞いたら

「電波を受信したから」

「うひ答えられて思わず拳が出たのは仕方ないよね。

アルと言えば昨日「かわいい」って言われてベットの中で「うひ」
う悶えてなかなか寝付けなかつた。

私はアルが好きだ

理由は単純つていわれるかもしないけど一目惚れに近い。お母さんが倒れた時に助けてくれたときにかっこいいお兄さんだなって思つたのが始まり。どうしたらいのかわからなかつた私を助けてくれたのが、童話に出てくる白馬の王子様みたいだなつて思つたんだ。それからも勉強を見てもらつたり遊んでくれたりしてくれて、一緒にいた時間が憧れみたいな気持ちから好きに変えていった。
お母さんに話したら「落とすのてつだつてあげる」って言つてくれて、服を選んでもらつたり「思いつきり抱き付いてきなさい」とかアドバイスをくれたりした。ちょっと恥ずかしかつたけどね。
結果はどうなんだろう? もしかしてそういうことをしてゐる理由に気付いてもらえてないのかな?

だとしたらきっとアルは唐変木とか朴念仁とかいわれる人なんだ
!!

「シャルロット、頭大丈夫？」

「いきなり『頭大丈夫?』は失礼ですよ。マルゴさん」

マルゴさんはテュノア社の技術者で私専属と言つていいぐらい私の使う機体を見ててくれる。私のクセも把握していて、他の技術者に見て貰つた時とは使いやすさが段違いなんだ。

「だつてねえ。いきなりニヤニヤし出したと思つたら、次は顔を赤くして、最後にはブンスカ怒り出すんだもの。心配にもなるわ」

どうやら思つていたことが顔に出ていたみたいだ。

「確かに昨日は愛しの彼と電話でお話する口だつたわね。あれかしら? ニヤニヤしてたのは彼にかわいいとかきれいとか褒められたからで、赤くしたのは告白まがいのことを思い出して、怒つたのはそれに気づいてもらえなかつたからかしら?」

「スルドイ…… 赤くなつた理由も当たらずとも遠からずだし……

マルゴさんはテュノア社では一番仲よくしてもらつている人でもある。私生活のこととかも話したりしているから、アルのこととも相談したりしている。

「そのとおりみたいね。顔に出てるわよ」

どうやら私は思つてることが顔に出やすいみたい。そういうえばアルとポーカーした時もほとんど勝てなかつたな。

「まあいいわ。今度また相談に乗つてあげるからまずはデータを取

るわよ。今日の起動実験では新型の特殊武装を試しても「うわ

「これを見て頂戴」と渡されたスペックデータを見る。

あまり言いたくはないけどイギリスのティアーズモデルのパクリだよね、これ。

BT兵器をラファール・リヴァイブに取り付けたとしか思えないよ。

BTには動作をあらかじめ組み込んであり、動いているものに対していくつかの陣形をとり攻撃、私の射撃データと歴代ブリュンヒルデの近接データをもとに回避動作をとるようになっている。

射撃データが私のもののは実際に取れたデータのほうが間接的に手に入れたデータよりも信頼できるからだそうだ。

ティアーズモデルより優れているとしたら操縦者自身が行動できる点かな。ティアーズモデルは思考の大半をBTに割く必要があるらしいからね。

この性能だとBTは主力としての運用じゃなく戦闘の補助にしたほうがいいかな？ BTで行動を狭め、ランプド・スイッチ高速切替による中距離戦か、
グレースケール灰色の鱗殻による一撃必殺が有効そうだね。

今回は起動と簡単な射撃だけだからコンビネーションとかはやらないけど、こういったことを考える癖を付けておけってアルから教えられた。「ある程度のシミュレーションをしておけばアクシデントにも対応できるし、失敗しても何とかリカバリできる。些細なことでも簡単なシミュレーションをしておけ」ってね。

「何か質問はある？」

「予想される連続稼働時間はどれくらいですか？」

「20分が最長、射撃を行うたびに減少していくわ。背中の射出口に戻すことでエネルギー充填も可能よ」

いくつかの質問を終わらせ準備を始める。

ISスーツを着込み羽をかたどったペンドントを首にかける
今日の担当がマルゴさんで良かった。

ISを起動させるときにはできるだけ余計なものは身につけておかないほうがいい。

他の技術者からは外すように言われるが、マルゴさんは大目に見てくれる。これが母の残していくものだということを知っているからだ。

準備を終え、試験場へと入っていく。
試験場は大体陸上競技のトラックがすっぽり入る程度で天井が開いている。

これは狭いほうで市外には高速機動などを見る大型試験場がある。
私が今いるのは武装などの試験をメインに行う場所なんだ。
その分大型よりも強力なシールドが発生できるようになっている
んだけどね。

試験場にはすでにタンペットが置かれていた。

しゃがんだ状態のタンペットに身体を合わせ起動する。

乗り心地はリヴァイブと変わらない。やっぱりBT付けただけか
と内心嘆息する。

観測室にマルゴさんの姿が見える。観測室は試験場に併設されていて実際の動作をデータ、目視の両面から記録できるようになつて
いるんだ。

『準備できたら始めるわよ

マイク越しに指示が飛ばされる。

操縦者指示による単体操作、複数操作、スタンダローンによる

単体操作とこなしていく。

その中で問題が浮かび上がっていく。

「エネルギー効率悪すぎでしょ……」

本来20分持つとされた連続稼働時間は5分にも満たず射撃を一度行うだけで使用ができなくなつた。

「射撃性能も悪いし……」

単体操作、複数操作ともに的に当たらない。BT適正は関係ない機体というコンセプトだから操縦者指示はあまり期待していなかつたけど、スタンドアローンも同様の結果とあつては話にならない。

加えて

「同士討ちするし……」

スタンドアローンの複数操作を行つた際に事件は起きた。

本来動き回る標的に攻撃をするはずだつたんだけど、BT同士が互いに攻撃を始めた。どうやら個体識別がうまく働かなくて、味方のBTを行動する標的として認識してしまつたみたい。

結論

『これは使い物にならないわね』

時間をかければ改善できるかもしれないが時間がないため起動実験を早めたんだ。正直これが改善される頃にはデュノア社は経営危機に陥つてゐると思つ。

『仕方ないわね。シールド切るわよ』

試験場を破壊しないように張られていたシールドが解除される。今回これが張られていなかつたら試験場はめちゃくちゃになつてい

たんじやないかな?

『所属不明の敵ISにロックされています』

その警告に對し回避行動を取れたのは奇跡に近かった。
瞬時加速で水平移動を行うのと同時、先ほどまで私が立っていた
ところに銃弾の雨が降った。

「なんだよ。フランス第三世代つていつから期待してたら二番煎じ
な上に、できそこないかよ」

『アラクネー?』

シールドを解いたことでひらけた上空から攻撃してきた機体が降
りてきた。

アメリカの第二世代アラクネ。ギリシャ語で蜘蛛を意味するその
特徴的な機体はいまだにこちらをロックしている。

『マルゴさん! すぐにシールド張つて』

観測室に指示を飛ばす。

『シャルロット。勝ちなさい』

その声は苦渋に満ちていた。多分私の考えが読めたのだろう。これが最も安全策だということが。ここで戦闘になつた場合観測室のマルゴさん危険だ。しかしここから出るわけにもいかない。ISで戦闘を行つて一般人に怪我人を出すのもまずい。となればシールドを張り、私がここでこの侵入者を相手するのが一番誰も傷つかない解決策つてことになる。

どんなふうに戦うのがベストかな。

近接戦はアウト。アラクネの特徴はその背中にある8本の装甲脚。先端には爪が付いており、手数に差が出ちゃう。手数が少ないので純粹にディスアドバンテージだね。

射撃は連射系の武装であれば多少の手数差を埋めることができたけど今回は実験のために多くの後付装備イコライザを外してきてしまつてはいるのが痛いな。

可能な限り遠距離戦で時間を稼ぐのが最善かもしない。イコライザがないとはいえ基本装備フレセットは付けられて、その半分以上が遠距離戦用武器。牽制しつつ騒ぎを聞きつけた他のパイロットが駆け付けるまで持てば2対1で有利に立てる。

そうなるとエネルギー残量が心配だね。さつきまでエネルギー消費の激しいBTを使つていたからもうそろそろ残量が厳しい。多分まともな戦闘は行えない。

「君たちはどこの人なのかな？ アラクネ使つてるけどアメリカではなさそうだけど？」

会話をして時間を引き延ばすのがまずは最善。動かなければその分エネルギーの消費を抑えられるからね。

「はっ！誰が教えてやるか！」

「まあ、そうだよね。君をとらえてからじつくり話を聞けばいいし

ね

「年上相手に君つてなめてんのか！ 大体この『亡国機業』のオーダム様をてめえみたいなガキが捕まえられると思つてるのかよお！」
(言つちゃうんだ。この人頭弱いのかな？)

心の中で突っ込んだ私は悪くないはず……

「亡国機業」かなんのかは知らなしがこんな」としてくる。ことはきっとテロ組織だよね。

「狙いは何?」

タンペットモデルが狙いなのは推測できるけど、データ収集が強奪だったのかはわからない。だがこのタイミングで乱入してきたつてことは……

「できそこないでもコアは貴重だ。頂いて行くぜ」
やつぱり

コアは世界中で467個しかない。 となれば1つ手に入れるだけ
で戦力は飛躍的に上昇する。

汎用機であるリニアイフは専用機と比べて設定に甘いところがある。無理やり組み敷かれれば、機体から引きずり出されてしまう。試験機として個人認証を行っていないこのタンペットでも同じだろ

「わあて、お話を終わりだ。おとなしくHを渡しな。命だけは助けてやるからむ」

引き延ばしも限界だね。アサルトライフルの『ガルム』を量子展開し構える。これはフェイクですぐにショットガン『レイン・オブ・

サタディ》へと切り替えるよつ準備する。ぶ分あちらの行動は近接攻撃のために接近。そこで至近距離からショットガンを打ち込めばかなりエネルギーを削れるはず。もし怯めば一度距離をとりサークル・ロンドの要領で牽制する。怯まず突っ込んでくれば距離を保ちながらショットガンで攻撃でいい。遠距離だつたらじのままガルムで戦闘を続行だ。

さあどう来る?

オータムの一手は私の予想を覆した。

オータムが量子展開したのはグレネード。それを迷いなく私との中間に向け発射。視界が一瞬にしてふさがれる。

そして悟つた。オータムの狙いは爆炎にまぎれての接近。先ほどまでプランはあくまで相手を認識できることが前提だつた。ISにはハイパーセンサーが付いているが目視するよりも把握が一瞬遅れてしまつ。

そこにもしアレを使われたら!

「ほら、捕まえたぜ、お嬢ちゃん」

回避行動をとる前に炎の中から現れたオータムに捕まつてしまつ。イグニッショングースト　さつ き私も使つた技術。一瞬にして最高速を得るこれならば私が回避する前に接近できてしまつ。おそらくはあらかじめハイパーセンサーに頼つっていたのだろう。もし回避しても私がいる方向へと接近できるようだ。

さつきの会話から頭に血が昇りやすい単純な相手かと侮つていた。

両手をふさがれ、背後の装甲脚による連続攻撃にタンペットのシ

ールドエネルギーが0となつてしまつ。

具現維持限界と呼ばれる状態に陥りすべての武装が使用不可となつた。

装甲の強度も落ちてしまいタンペットが次々と壊れしていく。

それを確認したオータムが私を地面へと投げつける。

絶対防御のおかげで死ぬことはなかつたが、PICOも切れてしまつているこの機体では慣性を殺すことができずその衝撃がもろに伝わつてくる。

意識を保つてゐるのが奇跡だつた。

「さつきは面白いこと言つてたな。私を捕まえるつて？ ならこの状態はなんだ？ 私が立つていてお前がはいつくばつているこの状態は！」

ゲタゲタと笑う声が耳触りだ。

首をつかまれ引きずり起こされる。

「本来ならぶち殺し確定だが、みじめに命乞いをすればさつきの言葉は水に流してやるよ！」『私のような屑が歯向かつて申し訳ありませんでした。どうか命だけは助けてください』つてな。ほら言えよ

よ

狂つたように笑うその顔が目に入る。

さつきといひで命乞いをしてもアルは許してくれるんだろうな。命あつてのモノダネだろつて笑つてわ。

「わ…………た…………せ…………だ

「あん？」

だけど
「わ……か……た……い……せ……ひ……だ」
「きいじえねえよ」

だけどきっと
「わた……はか……きたい……いっ……せか……ちにな……だ」

だけどきっと私が私を許せなくなる

「わたしはかれのきたいといつしょにせかいいちになるんだ」

それは私の夢だった。

いつか彼の作った機体と一緒に世界一、ブリュンヒルデになる。こんな女に命乞いなんかしたらあの地下で眠っている『黒騎士』やこれから彼が作っていく機体に乗る資格がなくなってしまう気がするんだ。

だから命乞いなんてできない。

「ばーか」

精いっぱいの虚勢を張る。

私が彼と歩む誇りを保つために……

オータムの笑いが憤怒に変わる。

「そうか。じゃあ

死ねよおおおー！」

取り出されたのは見たこともない武器だった。

少なくともこれまでラファール・リヴァイブには搭載したことのない武器だ。

おそらく殺傷を目的とした絶対防御を突き破る武器なのだな。

（これは死んじゃつたな）

マルゴさんの悲鳴がどこか遠く聞こえた。

いろいろな記憶が呼び起された。

最近はじめてあつたお父さん。いろいろと世話を焼いてくれたマルゴさん。クラスメイトのみんな。あの小屋で遊んでくれた彼の友だち。昔飼っていたちょっと不器用な黒猫。そして

（お母さん、アル）

大切に育てくれたお母さん。大好きなアルフォンス。

武装が私に向かられる。

怖くて涙が出そうだ。死にたくない。まだやりたい」とはたくさんあるんだ。

でも

この誇つを曲げる」とはできなかつた。

田をつぶり衝撃が来るのを待つ。

衝撃は来なかつた。

「なんだこりやあ！」

突然の驚愕の声に目を開く。

そこには

黒いリング状の何かがオータムの武器を受け止めている姿があった

「なに…… これ……」

リング状のなにかは私の周りをぐるりと一周している。よく見るとそれは一本からなり、隙間をあけてねじれている。本で見た遺伝子をフラフープのようにすればこうなるんじゃないかと思う。

「くそったれがあ」

何度も場所を変えてオータムは武器を打つ（ビリやラ灰色の鱗殻と似たネイルガンのようだ）。

しかしリングはそれをことごとく受け止める。ビリやラスタンダアローンでオートガードをしているようだ。

ネイルガンでは太刀打ちできないと判断したのかオータムは背後の装甲脚を操作し八方向から私を狙ってきた。

それと同時に、円状だった一本のリングがほどけリボン状になる。そのうち一本が装甲脚に巻きつくとオータムが背後に倒れた。

どうやら巻きついたリボンが引きずり倒したらしい。

もう一方のリボンが倒れたオータムを拘束していく。

拘束から逃れようと暴れているがもう彼女は身動きが取れない。

さらに驚くべきことが起こった。

タンペットのエネルギーが回復していく。

空だつたエネルギーが回復しシステムが再起動する。

よくわからないがとにかくミット・ダウンをさせるべきだらつ。グレースケールを拘束され動けないオータムへと突きつけ射出。

第一世代最大の攻撃力を持つパイルバンカーがアラクネへと突き刺さる。

救命領域対応が発動しアラクネが展開できなくなり、オータムが地面へと転がつた。

『よくやつたわね』

『どこからか聞き覚えのある声が聞こえた気がした。』

リボンが拘束を解除し私の元に戻つてくる。

『シャルロット、それは何』

マルゴさんの声が聞こえてくる。

戦闘が終わつたのを実感した。

それっていうのはこのリングのことだよね

「私にもわかりません」

これが何かはわからない。

ただ作つた人は推測できる。

『えつ、ちょっと待つて。何このデータ』

急にマルゴさんが焦り始めた。

「どうしました？」

『急に大量のデータが送りつけられてきたのよ。しかも強制的に開かれて行つてるの…』

「つまりハッキングを受けているということですか」

「そうみたい。データの内容は設計図とプログラム？ 武装名『ジーン』？』

ジーンとは遺伝子のことだ。

「そのデータは多分この黒いリングのものだと思います」

『なんでそう思うの？』

「心当たりがあります」

間違いない。

これを作つたのはアルだ。

多分量子化してペンドントの中にしまつておいたんだ。

デュノア社のプロテクトはかなり硬い。

それを破るような人で僕を守るような武装を作るのはアルしかいない。

「とにかくシールドを解除してください。この女人を連れていくんで」

救命領域対応が発動したとはいいつ起きるかわからない。できるだけ早く対処するべきだよね。

シールドが解除される。

シールドが解除されると同時に、再び上空から攻撃を受けた。

その攻撃を回避しているうちに新たに現れたISにオータムが連れて行かれた。

油断した！ まだ敵が残っている可能性は十分にあったのに！
追いかけることも考えたが、すでにかなり離されてしまっている
だろう。

もし追いついて戦闘になつた場合、他に仲間がいないとも限らない。
ボロボロの私では負けるのが目に見えている。
追跡はあきらめざるを得なかつた。

それに

「すいません。もう限界です」

初めてした命がけの戦闘で精神的に疲れた。

ISが解除されるのと同時に私の意識が失われる。

起きたらアルを問い合わせてやると誓いながら……

「ふう、何とかなりましたね」

「ええ、初めての展開でどうすればいいか手間取つたせいでの子が危険にさらされてしまつなんて」

現在俺は自分の整備室でため息をついていた。

緊急コールに急いで部屋に戻つた俺は事情をイーラームさんから聞いた。

この緊急コール、イーラームさんが最重要だと思えることに使用されるものだ。

「だけどよかつたの？ ジーンのデータを渡してしまつて」「まあ、仕方ないでしょ。これがどういつものかわからないと交渉の余地もないんで」

ジーンを起動させるにあたり、いろいろまずいことをしてしまつた。

武装を展開するために黒騎士にシャルが乗つていた機体を取り込ませる必要があつた。

つまりもうあの機体はシャルの専用機と化してしまつたのだ。今頃黒騎士に組み込んだAIが設定を書き換えていることだろう。

途中エネルギーが回復したのも取り込んだ際に黒騎士からエネルギーが流れ込んだからだ。

たぶんあちらはペンドントを調べる。最悪内部の構造を無視して取り込まれたコアを取り出そうとするかも知れない。そうなればイーレースさんがどうなるかわかったものじゃない。

デュノア社にはあの機体をシャル専用にすることを条件にジーンの情報を渡すつもりだ。

すでに渡したデータは一部でしかなく、あれだけでは普通に開発するのに数年かかるだろう。

デュノア社としても悪い話ではないだろ。

さてはてシャルにはどう説明しようかね？

NGシーン

「なんだこりやあー」

突然の驚愕の声に目を開く。

そこには

黒いリボン状の何かに亀甲縛りで拘束されているオータムの姿があつた。

「くつ？」

間抜けな声が出た。

だつてリボンみたいなものがひとりでに巻きついているんだよ？
より行動を制限しようとやらしい奇妙な動きをしているんだよ？

「とにかく艶っぽい悲鳴を聞きながら私は再び目を閉じた……

『シャルをいじめるからよ』

「だからか聞き覚えのある声が聞こえた気がした。

第3話 特殊武装「ジーン」（後書き）

いくつか説明をさせてください

シャルの一人称

僕って言わせるかどうか迷ったけどあれは男のふりをする必要があつたからだと思います。なので私にしました。

世界の共通語について

独自設定です。みんな日本語ペラペラだから設定しました。

亡国機業について

これは主人公の影響といつていいです

主人公が友人に設計図渡す デュノア社 焦る 急ピッチで開発
亡国機業「盗りに行くか」

てな具合です。

シャルの戦闘思考について

詰めが甘いとしか言えないかもしませんがシャルはそこまで戦闘をしたことがありません。まあ基本テスパイだからとこと頼いします。

ジーンについて

黒いアルミサエルです。

機能は今のとこ攻撃に対するオートガードです。

もう少ししたら他の機能も出ると思います。

プロローグの修正で新劇場版に出てないじゃんと思われた方、パチンコにはアルミサエルしつかりいます。ですのでそれをもとにアルは作りました。

ちなみにタンペット ジーンはそれぞれ日本語で嵐 遺伝子です。

NGシーンについて
血迷いました。

今回はシャル本人強化フラグです
アルはすごいものを作った ジャあ自分も鍛えなきや
ということです。

アルの外見は十人並、お世辞込みでカッコいいほうです。
シャルのカッコいいお兄さんという評価は初恋補正です。

次IS学園入学直前のつもりです。

第4話 嘘（前書き）

予定変更でシャルに対するアルの電話証明回
電話を書くって難しい
今までで一番出来がよろしくないかも

『アル？ あれは何？』

「あ～、シャルロットさん？ 何をおっしゃっているのかわから
あれは何？』『ないのですが……』

「すげえ怖い…… なんていうか機械的でフラットな音声を聞いて
るみたいだ……

シャルに敬語使つたのなんて初めてじゃないだろ？

シャルから電話がかかってくることは予測していたが、元気？
程度の前振りもなくいきなりこれだよ。

「つまりお前が聞きたいのはこいつのことだよな？』『イレーヌさ
んが残していくはずのものになぜ俺が作ったと思わしき武装があ
るのか？』『

『うん、そう』

シャルにあれを渡すにあたつて、大まかに2通りの方法があつた。
俺から渡すか、イレーヌさんからのものとして渡すか。

今回みたいに黒騎士などを使ったときに誤魔化しやすいのは前者
だった。

俺からのプレゼントであれば大抵のことは納得してもらえるから
な。

だけど四六時中つけててもらつたかった俺は後者とこいつことにな
たのだ。

形見としてあれば人によつては多少のお手ひぼしを貰えるだろ
うし、シャルの性格上乱暴に扱つようなこともないだろ？

イレーヌさんは俺からのほうが大切にすると思うつて言つていた
のだがそんなことはないだろ？ 母親が残したものとただの兄貴分
からのプレゼントじゃその重みは違うしな。俺からは「イレーヌさ
んの形見だからいつも付けとけ」という忠告ぐらいでしかあれをい
つも付けさせることはできないだろ？

「今回起動した『ジーン』は俺が作つたものだ」「やっぱり。でもアルが作つたってことはこれはお母さんの形見じやないの?」

まあ、そう考えるわな。実際形見とは言い難いし……

「そういうわけでもない。確かに俺の作ったものもあるが、形見つていのち間違いない」

『詩經』卷之二

「黒騎士は覚えてるな？」

「実際のパンダの「」が黒崎士が量子化して「」にならなかったのか?

「驚おどろいた」

あまりの大声に思わず耳から受話器を遠ざけてしまつた。

『ちよつと待つて！ 黒騎士ってコアがないから動かないし全部の機能が使えないんじゃなかつたつけ！？』

「分かるから落ち」→ 話はるれが
この状態じゃ 文字通り話にならない。

それから俺が説明した内容はこうだ。

イレーヌさんは自分がもう長くないことを知っていた。そして俺に「シャルがISに乗ることになるかもしれない。とても不安だ」と相談に来た。そして黒騎士のことを知っていた彼女は「黒騎士をシャルロットの専用機にしてもらえないか」とお願ひしてきた。そこで俺はあるものを準備したらそうしてもいいと話に乗った。数日後彼女は無事それを手に入れ俺は黒騎士をシャル専用に組み立てた。

嘘と真実を「じちゃまぜ」にしたこの説明は一応筋が通っているはず。

「――まで質問は？」

お母さんに準備させたものって何?『

『五五之困勿用勿恤勿貞勿用往吉勿用』

「今日、一度目だな。天丼はよくないぞ？」

何やら」と流れていたの
いざやうござるぢやないよ!

卷之二十一

これは嘘。本当は去年のうちに解析が終わっている。女性しか乗

本當に云々金のうすに解林水絶林一いは
る。至りにかく
いが
……
れない理由とかそういうのも推測ができる。作るうつとは思わな

きつとブラックボックスは俺以外には解析できなかつただろう。
でも

なぜ篠ノ之束はこんなものを467個も作れたのか

その疑問は残つてゐる。

『でも今言ったよね？』
『アを作るのに必要だつたものって』

.....

「おい、シャルビうした」

『ねえ、今とんでもない仮説が思いついたから聞いてもいい

?』

「ん? いいよ?』

『黒騎士ってE-UJじゃないの?』

『正解。あれはISが発表されるのと同時期に俺が独自に開発したパワード・スージだ。ISが普及するに従つて互換性は付けたけどな』

『.....』

「また黙つてぢりした?』

『いや、アルの非常識つぶりに声が出なかつただけだよ。アルの歳を考えると当時10歳かそこらだよね? そんな年齢でなんに立派なものを作つてるアルつていつたい.....』

「褒めても何も出んぞー』

『これ褒めてるのかな? まあいいや、じゃあ次の質問。この黒騎士のコアは量産できるつてこと?』

ま、当然の質問だわな。

『いや無理。黒騎士のコア自体奇跡みたいなもんでな何回か挑戦したけどどうしてか失敗してしまつ』

『設計図通りに作つても?』

『設計図通りに作つても』

これは本当と嘘が半分ずつ。「黒騎士のコア」つまりE・コアは形骸こそ取り繕えるけど中身が無理。他人の魂をこれ以上封じ込めつもりはないし、神様の呪いでやろうとしても失敗するだろう。劣化コアはできるけどな。

劣化コアは魂がなくても動くコアだがE・コアとの繋がりが必要であり、劣化コア単体では意味をなさないよつだ。以前この劣化コアで黒騎士が動かないか実験した時に知つた事実だ。つまりイレークさんが入つたE・コアがある以上、劣化コアと黒騎士もどきを作れば動かすことはできるよつになつたわけだ。作る気ないけどな。

『次の質問。なんでお母さんは黒騎士を専用機にしたがっていたの?
?』

「現在あるどんなE-Sよりもハイスペックだから」

『私そんな話聞いてないけど?』

「そりゃあお前、良識ある大人と未熟なガキンチョだつたら教えられる内容に差があるのは当然だろ?」

「これも嘘。というか彼女がもともと黒騎士を望んでいなかつた以上嘘にしかならないな。当時現行のE-Sよりスペックが上なのを知つていたのは俺だけだ。」

『まあいいよ。じゃあひとまず最後の質問』

シャルは一呼吸置き

『なんでコアに必要だつたものをお母さんに準備させたの?』

僅かな怒氣とともにその言葉は放たれた。

『お母さんが病気だつてわかつてたんだよね? しかも多分アルがコアを作らなかつた理由はお母さんが準備したものがどうしても必要だつたけど手に入らなかつたからなんじゃないの? そんな手に入れるのが難しいものをお母さんが準備するにはかなり無理をしたんじやないかな? 病人に無理をさせるなんてむちやくちやだよ!』

その怒声はあの日のイレーヌさんを彷彿とさせた。それはきっと

大切なものに対する気持ちだからだろ?。

『愛をされていますね、イレーヌさん……』

「覚悟があつたから」

『覚悟?』

「そう、覚悟。彼女の覚悟を俺は見た。どうこつものかは伏せるけどすこい覚悟だった。コアに必要なものは、確かに入手は難しいけど覚悟さえあれば準備できるものだった。俺にはその覚悟がなかつたけどね」

シャルの質問に俺は一切の誤魔化しをしなかつた。俺にはあのぶつけられた気持ちに対しても嘘を言つことができなかつた。

今日唯一の誠意だつた。

「これはね最初にシャルが言つた質問の答えなんだよ

『え?』

「イーレースさんはシャルのことを心から思つていたからこそ準備ができた。だから俺は黒騎士をシャルに託せた。確かに作ったのは俺だけど、そこに込められた思いはイーレースさんのものなんだ。だったらそれはイーレースさんの形見といえるんじやないか?」

『お母さん…… くつうつわああああああああああああ……』

しばらく俺たちに会話はなく、シャルの泣き声だけが俺たちの間にあつた。

『「ゴメンね。泣き出したりして……』

「いやかまわないけど。もしまだ泣き足りないなら俺の胸を貸してやるぞ」

『いや電話でしょ』『これ』

泣きやんだけシャルは少し恥ずかしそうだ。泣き声聞かれればそうなるか。

今度からかいネタにしてやるっと……

「話は変わるがシャルよ」

『何?』

「黒騎士な、ほとんど機能制限していたんだけどビビの前での制限が大きく外れちまつたからその注意だけしとく」

『えつ、ちょっと待つて、何かメモを取れるもの探すから』

「いや、メモは要らん。注意は一つだけだ」

読むだけじゃ見落としかねないからなと付け加えておく。

『うん、わかった。ビビ』

「じゃあ注意な。黒騎士だけど

ジーン以外は絶対に使つな」

『え?』

「理由はいくつかあつてな。まずあれに使われている技術、第四世代相当だ」

『は?』

「あー、呆けるのはいいが聞き逃すなよ。俺が考えている第四世代はコアを複数搭載して連結させることにより大量のエネルギーによる長時間の行動を始め機体の換装や唯一仕様を起動させるなどの特殊行動が行える機体だ。つまり現在タンペットモデルを吸収し複数のコアを有する黒騎士はその状態になつている」

もともとE・コアと劣化コアでその状態だったがそこは伏せておく。

『え』

「でなわけで、技術が先行しそぎてるそいつはあんまりよろしくないから助かすよ。つぐ」

『おーけー···』

シャルがこうなるのも無理はない。現在、世界は第三世代を躍起になって開発している。そこにいきなり第四世代とかが出てくればふざけているのかといつことになる。

『そりゃいえ、タンペットモデル取り込まれたって言ったけど、どうなったの？』

「さつきまでお前んとこ」の社長と話しててな、俺がジークの情報渡す代わりにお前の専用機にさせた。大切に付き合えよ。それとIIS呼び出すと普段はタンペットモードルが出てくるはずだ。使うときはそっちな」

「三國志」

「…………」

「がんばれ！」

『うう、人ごとだと思つて、つていうかいの？ ジーンの情報渡したつなんがして。

「ジーン単体なら第三世代相当だ、問題はない。んで次『軽く流された……』

「一つ目、俺が開発したコアがばれるといろいろまずい」「まあそりゃだよね。一応設計図とか残ってるわけだし』

説明は不要みたいで助かる。コアが作れる人間は現在篠ノ之束だけだ。そこに俺という存在が加わればらしいことになる。たとえシャル以外が使えないとしても。技術を奪おうとする人間なんてコマンといでめんどくさいことこの上ないし、誘拐とか拘束とかそんなことにびくびく生きるのもいやだ。

「最後、あれスペック高すぎて使うとお前のためにならない。せめて国家代表倒せるようになつてからだな」「うん。第四世代なんて使いこなせる気がしないからね』

「いい子だ、しっかり実力付けるよ」

シャルが黒騎士のスペックに頼るようになることを恐れてこんな提案をしたが杞憂だつたようだ。声に強くなるという意思を感じられる。

「俺が直接いじれればこんな注意しなくて済むんだが当分そっちに行けないから注意だけだ」

『今度はいつ戻つてくるの?』

「わからん」

『つめたいなあ』

「お前を信頼してるからだ。してなきやすぐにそっちに行つて設定を戻して再制限してるよ」

『むう、その信頼が今は憎いよ』
電話越しにむくれているのがわかる。なんでだ？ 普通信頼してるとか褒め言葉だよな？

「ジーンの仕様はそっちにもうあるからそれ見る

『わざわざハツキングして送つてきたやつ?』

「それ以外にもさつき送つた」

『そついえればあの時なんでハッキングしたの？　あの後セキュリティの見直しか大変だつたらしく』

「それは簡単。飴と鞭だよ」

『どういづこと？』

「お前の親父さんとの交渉材料だつたんだよ。俺の要望を聞いてくれれば技術はやる。だけど拒否すればお前らのデータがどうなつても知らんよ？　つていうカード」

もちろん口には出さなかつたしそんな事をするつもりもなかつたがな。

電話越しにシャルがひいているのがわかる。
許してくれ。普段だつたら絶対にしないが、最悪イレーヌさんの命がかかつていたんだ。

「まあメリットが大きいんだ。十分交渉の余地はあつたよ」

第三世代開発が滯つていた『テュノア社はすぐに飛びついたしな。

「お前に言つておきたいのはこんなところか。シャルは何か要件あるか？」

『ねえアル。アルはお母さんがどこに行つたか本当は知つているんじゃないの？』

突然の質問に俺は一瞬答えることができなかつた。

「いや、それは俺も知らない。急にどうした？」

『ううん、なんでもない。じゃあね』

「ああ、また来週な」

電話を切つた。

最後動搖が声に出ていなかつただろ？　それだけが不安だ。

アルのことは信用も信頼もしている。

母の行方を

「アルの嘘つき」
私とアルの付き合いは長い。
嘘ぐらいならすぐわかる。
私がした質問で本当のことと答えてくれたのは最初と最後だろう。
そして
「アルが意味もなく質問に質問で返す時は嘘をついてる時だよ……」
辻褄合わせを考える時間稼ぎだ。
つまりアルは知っているのだ。

嘘しか教えられなかつたのならきっと何か理由があるはずだ。

その鍵は母が残した黒騎士のコアが握つてゐる。
そんな気がしてならなかつた。

第4話 嘘（後書き）

朱赤の釈明

本来今回はI.S学園入試直前の話を書こうと思っていたんですが説明を入れないとダメかなと思い変更しました。

書き方が下手とかの非難も甘んじて受けますが、できればオブレートに包んでいただきたい。

包んでいただけないと作者のガラスのハートが砕け散ります。

次回こそはI.S学園の入試直前を書こう。

そしてあの人を出そうと考えております。（予定は未定）

第5話 とある夏の日（前書き）

50000円 10000ユニーク突破

感想でもっと早く書いてと言われましたが、私は筆が遅いのでこれ以上は無理です。

これ1話書くのに7時間くらいかかります。

毎日更新できる人とかどれくらいで書いているんだろう？

もし感想に頑張つてとか増えたら早くなるかも（チラッチラッ）

それでは第5話どうぞ

第5話 とある夏の日

日本の夏は湿気のせいかヨーロッパより不快だ。日本に来て初めての夏に辟易している俺は現在

「せつせと出せと言つていいるー。」

「無理です。どうかお引き取りください」

口論していた。

ことの発端は目の前の実技教員がISの使用申請を怠つたため。使用申請は事務と俺たち整備担当にそれぞれ提出することになっている。

彼女はそれをせず、つい先ほど直接取りに来て口頭で「貸し出せ」と言つてきたのだ。

「ラファール・リヴァイブは整備が不十分です。打鉄なら貸し出せますのでそちらにしてください」

「本日の訓練は射撃なのだ。打鉄では不向きだ」

IS学園には2種類の訓練機が配備されている。

近接用の『打鉄』、射撃用の『ラファール・リヴァイブ』だ。

ラファール・リヴァイブは格闘戦も可能な万能機だが、打鉄がガード性能を高めた近接向きの機体であるため射撃訓練用に特化させた装備にしている。

火器管制システムの精度においては、開発コンセプトの面からみて比較する必要さえ感じない。

「大体、きちんと申請すればこんなことにならなかつたんです。前

に来た時も当面こきなりでしたよね。その時に言つたはずだ。『整備が間に合わないことがあるからきちんと書類を出してください』とね』

もし彼女が初犯なら俺も仕方ないと、メンツをかき集めて整備してもいいと思う。しかし、目の前の人物は以前も同じことをしている。その時は整備も十分だつたため注意しながらも素直に貸し出したのだがそれが良くなかったらしい。

「そうだ。そもそもなぜ整備していない？ 貴様らの怠慢ではないか！」

「普段はきちんととしていますよ。ついさつきまで2年の整備科が解体と組立ての授業をしていました。あなたから申請があれば打鉄でそれをやるなり方法はあつたんです。だけど今日は何の申請もなかつたから新鋭機のラファールでやりました。誰の怠慢かというのであればあなたのですよ」

整備する時間がなかつたわけでもない。優先しつつ急いでやれば十分に整備が可能だつた。しかし俺には他の仕事もあるわけで、次の申請までに整備すればいいものを優先させる必要もなかつたため放置していたのだ。

「組立てまでやつてこらのだろう？ ならばそれでいいから貸し出せ」

「そういうわけにもいきません。2年ではまだ経験が不足していますのでどのような不具合が出るかわかつたものではありません。責任を持ちかねます」

もしこれが3年の整備科だつたら話は別だ。去年1年間教えてきたのである程度信頼できる。どこが注意すべき点などのなどをしつつ

かり教えてきたからな。しかし実技経験が十分ではない2年ではどこに落とし穴が開いてるかわかったものじゃない。

「責任は私が持つ。だからわざと出せ」

「いくらあなたが持つと言つたところで俺たちにも責任が発生するんです。何度も出せと言われても出せません」

それにこの人が責任を持つとは思えない。だつてこの人は

「いい加減にしろ！ そもそも整備科など教員にしろ生徒にしろ操縦者になれない落ちこぼれの集まるところではないか。操縦者とて整備ぐらいできるのだからな。私たちのようなエリートに使われるだけありがたいと思い万全のサポートを常に敷いておけ！ 出せと言われたらハイと出すのが貴様らのよつな落伍者の仕事だ！ そんなこともわからんのか、これだから男は！」

バリバリの女性至上主義、そして超エリート思考だ。

もし責任が発生したら俺に吹っかけてくるのが目に見える。

整備科で唯一の男である俺など目障りなのだろう。

俺がこんな腹立つ女に丁寧に対応しているのも言葉使いがなんたらとかいわれて話が長くなるのが面倒なためだ。

だがこの女は今言つてはならないことを言つた。

結構寛容な俺だが先ほどの言葉は聞き逃せない。

「てめ「HSの使用申請用の書類を提出に来たのだが、どうかした

のか？」

今にも掴みかかるうとした俺の言葉に割り込んできたのは、凛と

した立ち姿の女性だった

織斑千冬

元モンド・グロッソ総合優勝者ブリュンヒルデの称号を持つ彼女は今年の春からエリ学園において実技の指導を行っている。

今年の入試倍率が例年を大きく上回ったのは彼女が教鞭をとるという情報が漏れたからだと言われている。実際ミーハーのが去年より大幅に増えた。

わからなくもないが、すっげえ美人だし……

そんなことを考えている間にエリート女が織斑先生に何か話している。

多分状況を話しているんだと思うがどれだけねじ曲がって伝えているやら……

「ふむ」とか「なるほど」とか聞こえてくる。

そして織斑先生が出した結論は

「整備ができるいなら仕方ないでしよう。あきらめるべきです」
俺の言い分を受け入れてくれたものだった。

「とはいえる、授業に穴をあけるわけにもいきません。打鉄は動かせるのですね、アラン先生?」

「ええ、打鉄は解体していませんので、すぐに使えます」

「ではこりしましょ。実は明日同じクラスで近接訓練を行う予定でした。ですので授業を振替え、今日これから近接訓練を行い、明日射撃訓練を行うというのはいかがでしょうか?」

俺に文句はない。ちゃんと整備さえさせてくれれば書類が遅からうがいいのだ。

「どうやらHリート女も意見はなかつたようだ。

「ですが次からは書類の提出はしつかりとしてください。今回のようつまく解決できる日ばかりではありません。そもそも社会人ならばして当然のことです」

「おーおー、言つてやつてくれ。俺から行つても男のくせいで流してしまう人なんだ。女性で世界最強の操縦者が言つてくれれば多少の効果があるだろうよ。」

Hリート女は「わかりました」と虫の鳴くような小さな声で言つた後、整備室から出て行つた。

最後に俺を一睨みしていくのも忘れない。

また明日あれの相手をしなきゃならないと思つと気が重い……

「織斑先生ありがとうございました。助かりました」

「彼女も射撃に関しては優秀なんだが……」

織斑先生、そのフォローではそれ以外が問題だと言つていますよ。

「ところで織斑先生、いつから見ていました？」

「気が付いていたのか。怠慢とか言い始めたあたりだな」

あまりにも乱入のタイミングが良すぎたからな。

「話が終わつてから出でたかと思ったのだが、アラン先生の気配が変わつたからな。あわてて入つた次第だよ。しかし意外だ。アラン先生は大抵のことを笑つて流せる人間だと思つていたのだが」

男がこの学園でやつていくことは多少のことで動じるようではない。

俺以外にいた男性職員は用務員の轡木さんをのぞいてすぐにやめてしまった。

さつきみたいな女性至上主義者や好奇の視線に耐えられなかつたのだろう。

轡木さんは人当たりも良くてこの学園の良心とまで謳われる人物だし、奥様がこの学園の学園長だ。わざわざ囁みつく輩もいるまい。

俺は基本整備室にいるから接触する人も少ないし、どうでもいい奴からの評価など本当にどうでもいいのでまだここで仕事をしている。

「俺が侮辱されるなら別にかまいませんし、男だからとか言われてもそれがどうした?って思います。でも、整備にかかる人や生徒を馬鹿にされたのだけは許せなかつた!」

彼女たちを侮辱する発言。それが俺の堪忍袋の緒を切つた。

「確かにやる気がなくて出来が良くない奴はいる。でもな、ほとんどの奴は努力をしている。そんな奴らは将来機体の設計をしたいとか研究施設に入りたいとか操縦者をサポートする夢を持つて整備科の門を叩くんだ。言っちゃ悪いが、IS学園に入つてなあなあで普通科を卒業していくやつらとのやる気なんて比較にならない」

去年の半分だけだがこの学園で教えてみて感じた。IS学園卒業という肩書を持つためだけに最低限の技術しか学ばない奴が結構いる。

世界にISコアは467個。この学園を卒業してもその9割以上は専用機を持ってない。その現実に多くの生徒は打ちひしがれ脱落し

ていく。

「整備に関してだつてそうだ。あいつは整備もできるとほざいたが、操縦者がする整備など俺らからすればたかが知れている。細かな調整のノウハウは機体と向かい合い続ける整備士ならではのものだ」

操縦者は花形かもしれないが、整備士がいなければ機体をろくに動かすこともできないだろう。

ISのパフォーマンスを最大限引き出すには整備士の実力による部分が大きいのだ。

「そいつらを落伍者だなんだと侮辱するような奴を俺は許せない」

あいつらの努力を踏みにじりつとした、それだけが許せなかつた。

織斑先生が驚いた顔をしていた。

「なんですかその顔」

「いや、アラン先生は私の知り合いみたいな雰囲気がしたから、他人のことなど気にしないかと思えばそんなことはなかつたのだな」

「もしかして篠ノ之束と比較してます？ やめてくださいよ。他人の評価を気にしないって面があるのは否定しませんが、俺はあそこまで常識知らずじやありません」

「一応あれでも私の友人だからな、それについては黙秘しておこう」

少しだけ笑いあい織斑先生が取り換えた授業の準備のために出て行こうとする。

あと一步で整備室から出ると言つ時に立ち止まつた。

「アラン先生、最後に一つだけ聞かせてほしい」

「なんですか？」

「なぜI.S学園の教員にならうとした?」

「俺はスカウトされたからですが?」

「それは経緯だろう。私が聞きたいのは動機だ」

急に言われて少しつまる。

これを言うのは少し恥ずかしい。

「大した理由じやないですよ」

「それでも聞いてみたいな」

誰にも言わないでくださいよと前置きしてそれを話し始めた。

「理想の関係を作りたかったからです」

「理想?」

「俺はできる限り関わる人を助けてあげたいんです」

これが教員になつた俺の行動指針

「自分で言うのもなんですが俺には才能があります。この才能で操縦者には俺が万全と思える機体に乗せることで整備士として助けてあげたいし、整備科の連中には俺の持てる技術をできるだけ教えることで教師として助けてあげたい」

才能をもつて生まれた俺が何をすべきか考えた結果がこれだつた。

同僚にやりすぎだと言われる機体チェックも
俺が持つノウハウを常識的な範囲なら隠さず教えるのも

俺の調整した機体に安心して乗つてほしいから
俺の教え子たちが将来全力で機体に携わつてほしいから

「そして一言だけ、ありがとうって言つてほしいんです。わがまま
でしょ?」
感謝は願うものではない。

だけ

その一言だけで彼女たちのために頑張ることができ。

俺はあのエリート女のような輩に俺たちが調整したISには触
れてほしくない。

整備科の面々が持てる力を駆け出し安全を追求しているあの機体たちに、それを当然であると感謝すら忘れたあのような女が座ること
が許し難い。

IS、操縦者、整備士

これらが互いに信頼し合わないとISはその真価を發揮できない
と俺は考へている。

ISは操縦者と整備士によって成長を促され

操縦者は整備士の調整に感謝しISに命を預け技術を磨き

整備士は操縦者の感謝にこたえるためにエラを改善し続ける。

そんな関係が俺の理想だ。

「教師なら助けてあげるだけで見返りなど求めるべきではないでしょ。だけど俺は聖人君子ではない。それだけではきっと疲れてしまう。だから感謝の一言がほしいんです」

「そうだな、教師としては間違っているかもしれないな」

だが、と織斑先生は続けた。

「人間としては当然だろう」

そんな答えを返しながら「ちらりをまっすぐ見てくる彼女に俺は気恥ずかしくなつてしまつた。

「しかしながらそんなことを聞くんです？」

「なんとなくだ」

「なんとなくつて……」

「ほら、早いいかないと授業に遅れますよ」

「ああ、すぐに行くとしよう」

そういうつて織斑先生は整備室から出ていつた。

それから織斑先生はちょくちょく整備室を訪れるようになつた。しばらくして整備科に織斑先生専用のカップが置かれることがなる。

他愛ない話をしてもすぐ帰る。

俺もコーヒーを入れて話を聞く。

そんな日常が続くと思っていた。

織斑先生の弟が世界で初めての男性操縦者となるまでは……

第5話 とある夏の日（後書き）

千冬とは砂糖を吐くよいな関係にはならない予定です。

予定では友達以上恋人未満といつ関係？

次はプロット（というのもおこがましい何か）で三番田くらにに書きたかったシーン
ISコア、亡国機業、織斑兄弟について。

第6話 邪推（前書き）

少しあとがきに原作ネタバレあります。

あと中盤とそれ以外の温度差が激しいです。

最後に千冬がキャラ崩壊します。

それでもいい方はどうぞ

『勝者 シャルロット・デュノア』

その表示にはっと息を漏らし、専用機《ロンド・オアラジュー》を解除する。

今日の模擬戦は負けるわけにはいかなかつたんだ。
今年 IJS 学園に向かう私には最後のチャンスだつたから……

国家代表との模擬戦

代表候補生として約一年。やつと巡つてきた最初で最後のチャンス。

アルとの約束「黒騎士を使うなら最低でも国家代表クラスの腕を持つこと」

もちろん国家代表に勝つたからといってすぐに使わせてもらえるとは思つていないよ。

でも勝つたという事実はアルだつて無視しないだろうし、制限を緩めるくらいはしてくれると思つ。

本当はきちんと国家代表になるとか、もつと時間をかけて証明していきたかったんだけどそもそもいかなかつた。

織斑一夏の IJS 起動

これまで女性しか扱えないとされてきた IJS を男性が動かした。
それが世界に与えた影響は大きい。

世界中で男性に対する検査が行われたらしが結果は皆無。
結局織斑一夏の特異性を証明するだけだつた。

フランス政府も接触を持とつとしたけど結果は惨敗。日本政府だ

けならなんとかなるらしいけど、その先に待っている彼の姉ブリュンヒルデの称号を持つ織斑千冬のガードが堅かつたらしい。

その織斑一夏がIS学園に入学するという情報が入り、そこでの接触を持つことにした。生徒同士の接触なら織斑千冬といえど断つことはできないだろうから。そして選ばれたのが私。年齢が同じだからというのが理由だった。子供でも作ってこいとかふざけたことを言つた豚（豚でいいよあんなの）には思いつきりグーパンしてあげた。周囲もさすがにその発言はどうかと思ったのか軽い注意だけで済んだ。

私が産むのはアルの子供だけだよ！

最初、IS学園には行かないつもりだった。IS学園にはアルがいるけど、もつと立派になつた私を見てほしかつた。だけど国の命令じや無視するわけにもいかない。

そんなわけで急ぎよ日本に行くことになつた私は、無理を言つて国家代表との模擬戦を組んでもらつたんだ。このままだと3年も黒騎士に触れることができないままかもしだれなかつたからね。なんとかアルに認めてもらうために苦肉の策だつたけど……

実は今日IS学園の起動試験なんだ。

IS学園ではいくつかの日程で起動試験が行われる。倍率が1万倍を超える以上1日では難しいしね。

織斑一夏がISを起動したのが初日の試験開始前だつたせいもあって全体的に試験は延期。

おかげで問題なかつたこの模擬戦と私の試験日がかぶつてしまつた。IS学園に問い合わせたところ、この模擬戦の映像を送れば起動試験を免除か、日程をさらに変更してくれるつて言つてくれた。

多分普段だつたらしてくれないけど今回はいろいろあつたから特別なんだと思う。

なにやら周りが騒がしい。

聞き耳立ててみると私が勝つてしまつたことが問題みたいだ。

IS操縦の腕は操縦者のセンスによる部分が大きいとはいへ、キヤリアがたがだか2年の私が第一回モンド・グロッソで好成績を残している代表に勝つたのは予想外だつたらしく大慌てで電話とかパソコンをいじつたりしてゐる。

もしかして私やつちやつた?

「シャルが国家代表に勝つた!？」

「ええ、あの子張りきつて訓練とかしてたからね。適性もAだし十分ありえたわよ、大番狂わせ。もちろんコアの発達ではこちらが上だけど、それだけで決まるほどISの勝負が甘くない」とぐらい知つてゐるでしょ？」

現在職員寮の自室でイレーヌさんと通信をしている。

そのなかでシャルの近況を知つた。

しかしあのシャルがねえ。どれだけ訓練してたんだらつか?

「ちょっとオアラ出してもらえます?」

「ええ、いいわよ。オアラー、アルお兄ちゃんが呼んでるわよー」

「うん、ちょっと待つてー、今行くー」

パソコンからイレーヌさん以外の声が聞こえてきた。

しばらくして出てきた人物は俺の知る一人を合わせたような外見をしていた少女だった。

「この子こそ元タンペットモデル、現ロンドモデル『ロンド・オアラジュー』の中にもの。

黒騎士がタンペットモデルを取り込んだ際にイレーヌ宅にいきなり現れた子供だ。

名前はもともとタンと呼んでいたが機体名変更に伴い改名。今はオアラと呼んでいる。

「お兄ちゃん僕にご用事？」

「うん、オアラに聞きたいことがあるんだけど、シャルの模擬戦で必要以上にお手伝いとかしてないよね？」

「ふう、それおねえちゃんに失礼だよ。お兄ちゃん。僕は何もしないよ。全部お姉ちゃんが頑張ったから勝ったんだ」

「この子は俺のことをお兄ちゃん、シャルのことをおねえちゃん、イレーヌさんをお母さんと呼ぶ。

最初のころ舌足らずな口調で「おにいたん」と呼ばれイレーヌさんと悶絶したのはいい思い出だ。

なんというか小動物をめぐる気持ち？ 断じて俺はロリコンではない！！あの頃はどこぞの北海道のファミレス店員の気持ちがわかつた。小さいのはかわいい！（愛する意味で）

オアラがむくれちゃった。こつなると機嫌取りしないとまずいな。

「オアラ、この前あげた熊のぬいぐるみ気に入つたかい？」

「うん！ 大きくてふかふかで、一緒に寝てるよ！」

機嫌とり終了。オアラが純粋（単純）な子で助かるな。

「じゃあ今度はその子のお友達をあげるね」

「わーーー」

ついついこの笑顔を見たくてプレゼンターをしつりやつりだよな。
あまりにプレゼンターをあげすぎてイレーヌ専用を増築したり家具を
増設したりした。

パソコンで作って送つこりんだりするから気分はグリッ マン？

オアラはシャルと同じでかわいこものが好きだ。これは当然とも
いえる。

オアラは常にシャルの影響を受けているのだから。

「オアラあとで送つてあげるからイレーヌさんと代わつてくれるか
い？」

「うんー。」

とてとてと画面から逃げていつた。イレーヌさんを呼びに行つた
のだね。づ。

しづめしづめすると伸びびイレーヌさんが画面に映る。

「聞きましたよ。またオアラに物をあげるんですけど？ あまり甘
やかしちゃダメですよ」

「いや、ついつこ……」

「つこじやありませんー。あなたはこいつもこつも

イレーヌさん子育て講義中…… しづめしづめお待ち下せー……

とこつわけです。わかつましたか

「はい……」

疲れました。イレーヌさんこいつ話題ーーー

「それですね、シャルに關してなんですがいくつか武装換装シス

テムを許可しようと思つんです」

「露骨に話をそらしたわね」

「氣のせいです。許可するのは背面の腰部スラスターは確定として、あとナンバーブースの4・5もしくは6を許可しようと思つのですが」「まあいいわ。6はまずいんぢやない? 今でもロンドモーテルは世界中で群を抜いた性能があるわ。6まで公表してしまえば完全なオーバーテクノロジーよ。まだ4と5の組み合わせのほうが言い訳が聞くわね」

「やつぱりそですか。じゃあシャルがTTS学園に来たらコアバイバスの調整とかすることにしますよ」

「ええ、よろしくね。』(「ンンン」)アラン先生、いるか?』あら、お密さん?」

「すいませーん今あけまーす! すいません。もともと今日織斑先生と話をする約束だつたんですよ」

「こんな時間から? 男女一入りりで?」

現在23時だ。

「男女一入りりつて……仕方ないんですよ。なんでも弟さんのことで一入りりで話がしたいそうで……」

今日の暁ごろ整備室まで赴いて今晚時間を作つてほしいと言われた。

俺からも話があつたため御渡りに船だつた。

「(普通女性がこんな時間に男の部屋を訪れるものじゃないわ。これはシャルに強敵出現かしら?)

まあいいわ。おやすみなさい

「おやすみなさい」

通信を切ると同時に、急いでドアに向かい鍵をあける。

「もしや電話中だつたか? ノック前には気付かなかつたが話し声が聞こえた」

「いえ、もう切るところだったので大丈夫でしたよ。中へどつぞ」
「そうか、では言葉に甘えることにしよう。失礼する」

ドアの前に立つ織斑先生はいつも通りスース姿。

一応この寮内は私服が許されているが、俺は先生がスース以外を着ているのを見たことがない。

織斑先生を中へ通し椅子に座らせ、俺はコーヒーを準備し向かい側の椅子に座る。

織斑先生はビールが好きなようだが、俺の話はこれ以上なくまじめなのでコーヒーにした。

「前置き無しで申し訳ないのだが、今日時間を取つてもらつたのは一夏、私の弟についてなのだ」

「コーヒーに砂糖を一杯だけ入れ、口をつけた織斑先生はそう切り出した。

「一夏がISを動かしたことで保護の意味でこの学園に入学することとなつたのは周知の事実だ。だがこの学園に男はほとんどない。アラン先生と用務員の轡木さんだけだ。女性の中で男性が孤立している。そんな状態では一夏のストレスも大変なものになると思う。なので比較的年齢の近いアラン先生にいろいろと手助けをしてほしい」

「手助けというのは具体的にどのようなものを？」

「多くは望まない。ただこの学園でこれまでどう過ごしてきたとかを話してくれたり、たまに話し相手になつてくれればそれでいい」
予想どおりだな。この人は大切にするが甘やかす人ではない。

「それくらいならいいですよ」

ひいきはできないが多少生活しやすくする程度の手助けなら俺もしていいと思う。

「そうか、ありがとづ」

織斑先生が僅かにほほ笑んだ。凜としている普段とのギャップが

す」。美人にこんな顔をされたらどうしてこうかわからなくなる。

その表情を見てこの話はやめようかとも思つ。

だけと言つべきだらう。

織斑先生の重荷を少しでも楽にできるなら……

「俺からも話したい」とがあつたんですね。長くなりそうですが、少しお時間よろしいですか」

「ん？ ああ聞こう。こちらの願いも聞いてくれたんだ。少し長くても別にかまわないよ」

安心しているその顔見るのがつらい。

「俺の話をする前に一つ聞かせてください。織斑先生はEVAの開発に携わっていますか？」

「イエスだな。作り方を聞いても無駄だぞ。どう作っているかは私も詳しくは知らんからな」

「聞きたかったのはあなたが携わっているところの事実だけです」

「それがどうかしたのか？」

俺は一拍だけ間をおいて話し始めた。

「ど」から話そつか迷つていましたが一夏君いやあなたについてお話ししようと思つます

「一夏はわかるが、私だと？」

「ええ、勝手にで申し訳ありませんがあなたの方のことを調べさせて

いただきました。これについて謝罪をしたいと思いました

「気にするな。あんなイレギュラーなのだ。経歴などを調べるよつてEVA学園側から言われたんだらう」

僅かに不快そうな顔をしたが許してくれた。仕方のないことと割り切つてゐるのだろう。

「半分、一夏君に關してはそう言われました。たいしたことはわからりませんでした。一夏君が女性に好意をよく抱かれることがくらいですね。ですが俺が話したいのは勝手に調べたあなたの調査結果についてです」

「ほう、私の過去に何か問題があつたと?」

織斑先生が興味深そうに俺を見つめてくる。

「調べた結果何の問題もありませんでしたよ。データ上では

「データではないところに問題があつたと?」

俺は一冊の本を出して机の上に置いた。

「問題はこれの中ありました」

「これは卒業アルバムか」

「はい、とある小学校のものです。あなたも持つているはずです。あなたが卒業した学校、卒業した年のものですからね。一見問題なさそうに見えます。ですがこれの中にはあなたが出てくるのが5年後半の行事からでした。これが少し気になつてこの小学校にいた生徒や教員を探して話を聞きました。その結果あなたは転校してきたという情報が手に入りました」

「データ上では一貫してこの学校で卒業していたが、それでは聞き込みの結果と食い違ひが生じる。

「データの改ざんでしょうね。おそらくは篠ノ之束が行つたのでしょう。俺でもデータ上では改ざんの証拠が見つけられませんでした。アルバムと聞き込みからあなたが「居た」と証明できたのが小学校5年に入つてからということになります」

「白騎士は十中八九織斑先生だろう。この後の俺の話が真実だとすれば白騎士事件の真相が大きく変わつてくる。」

「そう、あれはISの有用性を知らしめることが本来の目的ではなかつたということになる。」

「織斑先生の過去が改ざんされたのもそこに行きつく。」

「いじじまでが一つ目の話」

今回の話は3つの事実と1つの仮説。今その一つ目の事実が終わ
つた。

「次にEISコアについてです」

「さつきの質問と何か関係があるのか?」

「ええ少しだけ。俺はつい先日EISコアの解明に成功しました
「なつ!」

驚いて腰を浮かせるが、すぐに腰を下ろす。

「それが本当なら世界中が驚くな。さすがは半年でEIS学園整備科
副主任になつた男だな。それで? コアを作ろうと思つているのか
去年暇つぶしも兼ねて論文を大量に書いたのだがその功績で副主
任に任命された。

去年だけで主任がこれまで出した論文を超えるそつだがどうでも
いい。

給金は上がつたが、もともと小金持ちの俺にはあまり意味がなく
責任が増えただけだつた。

エリート女に文句を言えたのもこの肩書が大きい。

「いえ、あれを作る気はありません。だつてあれを作るには

材料として人間が必要になります」

「そうか、そこまでわかっているのか」

「ええ、まさか科学の粋に人間の魂ともいえるものが、オカルトが必要なんて誰も思いません。ブラックボックスになるわけです」

そう俺が行きついた結論はEISコアとEコアはほぼ同じものだというものだった。

違いは魂の保存率とでもいうもの。

100%を封じ込めるEコアに対し、EISコアは劣化して50～60%がいいところ。

それでも魂が入っている分Eコアからのバイパスで動いているだけの劣化コアよりは性能がいいようだ。

「ファーストシフト セカンドシフト一次移行や二次以降はその魂が成長した証」

ファーストシフトで魂が操縦者とつながり成長し、セカンドシフトでほぼ完全な魂となる。操縦者の情報を取り込み成長したために専用機はその人物以外が動かせなくなる。汎用機は設定的にもどもと成長がしないよう設定されている。この設定もブラックボックスの一部であり、設定の仕方は篠ノ之東が発表したものでどういうことが起こっているのかは誰も知らない。

オアラがシャルと好みが似ているのも当然だ。

シャルと元になつた魂がまじりあって成長したものだからな。

オアラこの1年で流暢に話せるまでに成長したのもそれだけシャルがISを起動させたからだ。

まったくあいつはどれだけ訓練に明け暮れたんだか……

「篠ノ之束がどうやって450人以上を用意できたのかはわかりません。その人たちを犠牲にしたことも俺には文句が言えない」

俺もイレーヌさんをコアに封じ込めてしまった。

束博士も何らかの理由があつたのかもしれない。

オアラがシャルに似ているのと同時に、織斑千冬の面影を残していることと関係があるかも知れない……

推測でしかないがな。

「ISは魂にある程度の類似性を持たないと動かないと推測しています。たとえば同性、たとえば家族、たとえば

クローン

向かいに座る織斑先生の顔色が僅かに変わってきた。

もう一口コーヒーを飲む。

「では最後に一年前のある出来事とそれにまつわる組織から話そうと思います」

「一年前というと私が赴任したころだな」

「ええ、ですがその出来事はフランスで起こりました。フランスのデュノア社がとある国際テロ組織に襲われました。当時開発中の第三世代を狙つたものでした。これをテストパイロットが撃退したというものです。これは部外秘でしたが俺は独自のルートから手に入れたものです。そしてその組織の名前は『ファントム・タスク』」

「ほう。それなりに有名だな」

「実は個人的にその組織のことを調べていたのですが不思議なことに日本だけ別な名前で呼ばれているようです。それは『亡国機業』。」

はじめ俺は「きぎょう」の部分をカンパニーなどの意味で書く企業だと思っていました。ですがこれは間違いで機業と書くらしいです」

テーブルにそれぞれの漢字を書いていく。

それに伴い織斑先生の顔がこわばっていく。

「機業とは『織物業』を指すらしいですね。織斑先生」

「そう……だな……」

「つむいてしまい顔色は見えない。それでも俺は話を続ける。

「調べていくうちにこの組織がどうやら日本で生まれたしたらしいということがわかりました。第一次世界大戦中の日独伊三国同盟、その中で三国はある部隊を発足します。ゲリラ戦に特化したその部隊の指揮官は織斑四季陸軍大佐。実動部隊には同盟国から選抜された兵士が50人、一個小隊いたと思われます。この部隊は自覚しない活躍をしますが、その後敗戦。ここで織斑大佐は敗北を認められず、この部隊」と姿を消します。そして各国から同志を募り、組織を立ち上げます。部隊の再編した織斑大佐の名前にちなみ、このとくつけられた名前が「失われた国々から生まれた織物業」、亡国機業だったと言われています」

口が渴いたため「一ヒーで口内を湿らせる。にがいな……

「この組織の中ではさまざまな研究がおこなわれているようです。主に分けると二つ。人間と兵器。人間分野ですがこの組織では優生学も推奨されていましたが人員の少なさからうまくいかなかつた。そしてある技術が生まれます。それが遺伝子強化個体。生まれないなら作ればいいということでしょう。これによって優れた個体が生まれました。たとえば人間が本来持つのが難しい重量を持つるほどに力を優れた個体や異性に異常に好かれやすい個体とかね」

動物はフェロモンというにおい成分を感じ取る。人間は大幅に退化してしまいほぼそれがない。これはコミュニケーション能力が発達したために必要がなくなつたからだと言われている。しかしなくなつたわけではなく未だにわずかながら残っているという研究成果が出ている。もし強烈な性に関するフェロモンを有する個体があれ

ばその個体が好かれやすくなる可能性もないわけではないだろ？

「力を持った個体は戦闘員として、異性に好かれやすい個体は諜報員として活躍しそうですね」

古くからハニートラップといつものあった。基本は男性に対し女性を差し向けるが、女性に対し男性を差し向けたという事例もある。

「この組織は3年前に一夏君を誘拐していますね。あなたの経歴を調べる上でドイツ軍の内部も調べさせていただきました。当時日本の中学に通っていた一夏君が下校中何者かに誘拐、あなたはドイツ軍の情報をもとに彼を救出。しかしそのためにモンド・グロッソを棄権したというものです」

「よくそこまで調べたな。ハッキングは犯罪だぞ」

「当時から自分の国の暗部として亡国機業をマークしていたドイツ軍が誘拐したという情報をあなたに教える代わりに、あなたを教官としてドイツへ招致。あなたはこのときにドイツ軍から亡国機業の情報を受け取ったのではないかと推測しています」

「これらのことから俺は一つの推論を考えました

「推論？」

「はい、まずはあなたは織斑大佐直系の亡国機業で生み出されたアドヴァンスド、一夏君はあなたをもとに作られたクローンを調整し男性として生まれた個体」

「もういい」

「そして十数年前当時日常に退屈をしていた篠ノ之束が亡国機業に接触。武器の開発に協力、ここで作られたのがIIS。使われたのはあなたのクローンたち。そしてあなたが11歳ごろ組織から脱走。このときに一夏君も連れ出した。束博士も一緒だったんでしょう。IISのコアも持つてね」

「もういい

「そしておよそ5年後、白騎士事件で亡国機業に手を出すなど暗に脅しをかける。あなたがあれほどのもの乗つているとなれば手出しがしにくくなるから。その後、IISを世界にばらまき世界があなたを狙わないようにした。5年もかかったのはおそらくIISのコアが脱走時未完成だったからじゃないでしょうかね。そして三年前の事件の真相は一夏君を取り「もうやめてくれ……。」

顔をあげた

「もう「ていう邪推です」……は？」

「うん鳩が豆鉄砲を食らつてきつと顔なのだらつ。普段がかっこいい織斑先生だから一層面白い。

「だつて推測に推測を重ねてるんですよ？ しかも他人を貶めるような。もう邪推といつていいでしよう？」

「いやさつき何個も証拠をあげていただらつー。」

「証拠？ 何のことです？」

俺はすつとぼける。

「私の経歴とか」

「ああ、きつと篠ノ之束が『ちーちゃんの小さい頃は私だけが知つてればいいの！』とか言つて改ざんしたんじゃありません？」

「一夏がIISを動かせる理由とか」

「俺そんなこと言いました？」

「言つただろー。一夏が私のクローンを改造した個体故にIISを動かせると！」

「勘違いはいけませんね。俺は推測と言つたはずですよ？ 俺もコアの構造がわかつただけで、きちんと動く理由がわかつてゐるわけではないので」

「亡国機業のリーダーだった織斑大佐とか！」

「偶然つて恐ろしいですね。織斑先生と同じ名字だ。でも珍しい名字ですけど織斑先生以外にいないわけじゃないでしょ？」

「私が戦闘に特化したアドヴァンスドとか！ 一夏が諜報用の個体とか！」

とか！つて普段使わないような表現をする織斑先生かわいいなあ

…

「何を言つてるんですか？ 僕が言つたのは力を持つ個体とかがあると言つたのと一夏君が女性に好かれやすいと言うだけですよ？ 一夏君頬いいし性格もいいみたいですから持ててもおかしくないでしょ。織斑先生は結構力もちですけどそれだけじゃあなんの証拠にもならないでしょ？ 第一もしアドヴァンスドで何がいけないんです？」

「なんだと？」

「アドヴァンスドの何がいけない？ そう生まれただけだ。これが自分から女を引っ掛けたいからとかってモテるよう改造成したり、そのことを知つて悪用したら俺も思うところありますけど、ただそう生まれただけなら顔がいいとかとなんら変わらない。織斑先生は美人を見て『美人だから成形して不細工にしろ』とは言わないでしょ？」

ヒートアップしていた織斑先生が疲れた顔になつていく。

「わからなくなってきた。アラン先生はなぜこんな話を私にしたんだ」

「えつ？ そうだなあ。特に意味はない？」

「意味もなくこんな話をしたのか！！」

おつとまたヒートアップ。

「意味があるとすれば、俺がこんな邪推する人間ですよつて教えるためですかね」

「どういうことだ？」

「こんな邪推誰にも話すことできませんし、かといってそれなりに

うまく話がまとまつたんでお蔵入りにするのももつたいたいかなつ
と思いまして……」

「私に話してくるじゃないか」

「当事者なら噂を真に受けて妙な噂流したりしないでしょ」「
自分テ口組織にいましたなんていう奴は頭がおかしいとしか言え
ない。

「それになんかこ」最近織斑先生思いつめてらっしゃつたよつです
し息抜きになればと思いまして」

「逆に疲れた」

「疲れるような要素ありましたかね？ それとこんな邪推する人間
でよければグチとかにつきあいますよ」

「馬鹿じゃないのか」

「いやほら吐き出しきのない悩みとかつてつらこじやないですか。
だから何かあれば相談に乗りますよ？」

これが今回の本題。

「それではまた邪推するのか？」

「そうですね。邪推つて楽しいですし」

「言つていることがゲスだぞ？」

「いいじやないです。誰かに言つわけでもありませんし
誰にも言わないとことを強調しておいた。

ふうと、どちらからともなくため息をついた。

口を開いたのは織斑先生だつた。

「一夏のことをなぜ引き受けた？ あんな邪推をしていたら面倒に
なるとは思わなかつたのか」

「まあ邪推ですし。何より前に言いましたよ」

もう一度言おう。俺の行動指針を確かめるために……

「俺は周りの人の助けになりたいんだって。そしてその中にはこれから入学してくる生徒や織斑先生だって含まれてるんです。だから困ったことがあつたら頼つてください」

「アラン先生後ろを向いて立つてもうえないのでどうか?」「別にかまいませんけど?」

「またか生意氣言つたからケツキックとかないよな……織斑先生にやられたらシャレにならない……」

それでも言われたとおりに後ろを向いて立つ。
一応衝撃が来る覚悟だけしておく。

衝撃が来た

でもそれはほんのわずかなもので尻とかではなく背中で……

「あの織」「いっしを向いたら殺す」はい……」

その声は僅かに震えてて、背中をつかんでいる手が震えているのもわかつて俺は何もできなかつた。

じばらぐの間部屋には誰かが泣く声だけが静かに響いていた。

掴まれていた服が解放されていたのはどれくらい経つてからだろ
う。

「もういいぞ」と弱弱しく聞こえた声で振り向く。
田の前にいるのは誰だろ？ 織斑先生とは思えないのだが？
うつむきがちになつて耳まで赤くなつて恥ずかしそうな田の前の
かわいい生物はなんだろ？

「アラン先生」

田の前のかわいい生物の口から出てきた声は織斑先生のものだつ
た。やっぱりこれ織斑先生なの？ 普段と違いすぎてかわいすぎて
困るんだけど……

「えーと、何でしよう織斑先生」

「もうすぐ一夏が入つてくるので織斑ではなく千冬と呼んでいただ
けないだらうか」

「いやでも先生つて付ければ」

その先は言えなかつた。泣きそうな顔をしながらとんでもない殺
氣を飛ばすという人間離れした技術を發揮している彼女によつて……

「えつと、千冬先生」

「うむ、それでいい。私もアルフォンス先生と呼ぶことにする」

「いや言いにくいでしよう」

「ならばアル先生だな、これならば問題ない」

いやなんか微妙じやないか？ とある先生みたいで……
まあうれしそうだからいいか。

「そうだ、一夏の手助けをしてもうお礼もしていなかつたな」
「いや、いいですよ。さつきありがとうって言ってくれたでしょ？」

「仮にも社会人同士なんだ。それでは気がひける。そうだと手を出してくれば。そして目をつぶつてくれないか？」

「なんかくれるんですか？ あんまり高いものとかやめてくださいよ。俺の気がひけます」

「安心しろ。金銭的な価値はゼロだ。ほら早くしないか」

なんかテンションがおかしい気がするがああ言われた通りにする。

はつ、まさかさつきの腹いせに今度こそ腹パンでもする気だろ？ か！

気付かれないように腹筋に力を入れておこう……

また衝撃が来た。

今回も予想外のところで顔つていうか口付近…… ついでにやわらかい…… つうかこれってまさかっ！

思わず田をあけると顔の前に織斑先生の顔があつた。いや千冬先生か……

つうかこれキスされてんの！？ なんで！？
いや確かに全部知った上で相談乗りますとか言つたけどフラグなんかいつ立つた！？

1分にも10分にも感じる長い時間が流れる。

ゆっくりと千冬先生の顔が離れていく。

田をあけた千冬先生が初めに言つた言葉は

「こういうときは田をつぶるのがマナーではないか？」

文句だった。きっと俺があけて焦つたのを感じたんだろう。

「え、いやつ、あの」

混乱の極致にいる俺の口から洩れてくるのは言葉にならないなに

かだった。

「ところでアル先生は初めてだったか」

「まあそうですね」

質問に答えると、いつも単純な作業を何とかこなすつていうかなにこたえてんだ俺！」

「ふむ、それは困ったな

「なにがですか」

やつとのことで、混乱から立ち直つたけど、よくわからなうことを千冬先生が言つた。

「いや、お礼としてファーストキスあげようとしたが、同じものをもらつてしまつた。これではお礼にならない」

「 × 」

あまりの事態に言語を話すことを放棄した。

ファーストキスですかいや男性と女性のそれに対する重要さは段違いだと思いますつていうかなんで俺なんかにそんなものくれちゃつたりするんですか確かに千冬先生みたいな美人からしてもらえてうれしいつて思つますけどあんたそれでいいのか！？

「それでは夜も遅いし帰らせてもらひつ。今度何かお礼を考えておくことにする」

そう言つて俺が止める間もなく颯爽と部屋から出て行つた。千冬先生が扉を閉まる直前

「そうそう、私は優しい男が好みのようだ」「だとかおっしゃつてくれた。

えつとこの場合俺のこと指してんのか？

俺じつちかつていうと優しくないと思つたけどね。どうこうことなの誰か説明して！！

「」の日俺は眠ることができず翌日ドリンク剤を飲みながら講義を

するハメになつた。

思わずキスをしてしまつた。

今まで私には頼れる人がいなかつた。

親から逃げ、ずっと一夏を守つてきた。

そんな中で誰かに寄り掛かるという経験はなかつた。

信頼しているのは束ぐらいだが、あいつはどちらかというと対等な関係だし頼つたりしたら斜め上の結果を出してくるだろう。

そんななかで私のすべてを知つておきながら邪推と誤魔化し、さらには頼つていいと言われた。

あんなふうに優しくされたことなんてなかつた。

その優しさに今まで張りつめていたものが切れてしまつて、つい涙が出てしまつた。

それを何も言わず受けとめてくれたことがうれしくて名前で呼んでもらつたり、愛称で呼ばせもらつたりしてしまつた。
もしかして私は意外と惚れっぽかつたのか？

下手な言い訳だったが、また何かしてあげる口実も作れた。

どんなことをしたら喜んでもらえるだろうか？

まずはそういうことに詳しそうな人から話を聞いてみるか……

その夜あまりの恥ずかしさに眠ることができなかつた。

翌日、つい授業中にあぐびを漏らした織斑先生に生徒たちは世界の終りが来ると戦々恐々としたといつ……

第6話 邪推（後書き）

こべつか説明を

HSニアについて
多分本編にでてきた白い騎士とかラウラの夢の中に出てきた尋問官
とか、ニアに搭載されたAIとかだと思つたですが、本作では人間
の魂といふことにしました。

操縦条件について

こちらも推測ですがAIの姿がすべて女性であることが女性しか乗
れない原因と深く結びついているのだと思つてます。

織斑姉弟について

ぶっちゃけ筆者の推測はこれに書いたとおりです。
これだとマデカとか一応説明つくんで……

こりこり推測とかつて書いたらまづいのかな？

千冬はやさしくされたらこう といつてしまつた。
どうしてこうなつたし……

あと途中でナンバーバーズつて出でるけどリリなのじゃないですよ。
決して金属爆破したり幻出したりはしませんのであしからず。

修正

2巻で千冬が小学校に行つていたといふ記述があつたため千冬の過
去を修正しました。

もしかしたらビコがおかしくなつてるかもしねのでおかしかつ

たら教えてください。

第7話 邂逅（前書き）

前回とは雰囲気がガラッと変わります。
口メテイー色を出してみたいと思つてみました。
うん、私にはこれが限界だったよ……

キャラ崩壊注意です。
特に千冬……

第7話 邂逅

俺は細かな整備が終えると急いで教員用の整備室から部屋に戻っていた。

IS学園にはいくつかの整備室がある。

それぞれアリーナに併設されており、用途に応じて使い分けるのだ。

教員用整備室つていうのは字の通り教員が打鉄などの訓練機の整備を行うための整備室だ。前に行つた解体と組立てなんかの講義をしたあとは基本的に俺ら教員がここでチェックを行う。

蛇足だつたな。

さて俺はなぜ急いで部屋へ向かっているのか？

答えは掃除をするためだ。

急に俺の部屋に同居人が増えることになり彼の分のスペースを作らなくてはならないのだ。

一人で一部屋を使わなければならなくなつた理由を説明しよう。

まず明日はIS学園の入学式だ。
ちなみにIS学園は完全入寮制。
もうほとんどの新入生は入寮しているころだらう。
シャルは本国での仕事なんかがあるらしく今日来るとか言つていたな。

ここで問題となつたのが織斑一夏の入寮だ。

一夏君は男。だが他の生徒は当たり前だが女性。

そのため自然と学生寮も女子寮であり、そんな中に男を放り込んでいいものかということだ。

これ、俺が気付くまで誰も気がつかなかったんだ。代表候補生が3人も入ってきたりして大変なのはわかるがそこは気付いてほしかった。

急遽行われた話し合いの結果、俺と相部屋になることに決まった。元々俺はあまり部屋に寄りつかないで整備室で過ごしているし意見はなかつた。

一夏君にはまだ知らせていながら明日学校で教えることになる。シャワー上がりにばつたりは？ 黒兎の寝床侵入はどうなるの？ つて毒電波が来た気がしたが気のせいだな。

女子しかいない学生寮には入れられるわけないだろう、常識的に考えて。

一夏君には教師と同室つて言つのは少し酷かもしれないけど諦めてもらおつ。

設備は学生寮よついいし（風呂トイレ別、キッチン付き）、俺も寝に戻つてくるぐらいだしつるたこと言つつもりはないから許してくれ。

そんなわけで一夏君の生活スペースを空けるために掃除をしなければならなくなつたのだ。

部屋の前に着くと千冬先生がドアの前に立つていた。

「千冬先生どうしてここに？」

「今日の昼に掃除をすると聞いていただろ？ 手伝おつと思ひおつと思つてな

あのキスの日から千冬先生とは…………普通だ。

あの日の翌日こそ整備室には来なかつたが、その次の日には普通にコーヒーを飲みに来た。

あまりにもいつも通りでむしろ「から話をする」とすらためらわれた。

「へタレと言いたくば言えー。」しかし今回的人生で彼女いない歴イコール年齢なんだよー。

それからもそれまで通りに話してあの部屋での出来事が夢幻の類だつたのではないかと思つことすらある。もし新たに加わつた俺たちの習慣がなければ本当にそうだつたのかもしれない。

千冬先生がお弁当を作つてきて、整備室で一人で食べるようになつた。

なんでも料理の練習兼一夏君のことのお礼らしい。

よく食堂に行くのが面倒で昼を抜いていた俺には嬉しい限りだつた。

きつと以前よく昼食を抜くと言つたのを覚えていたんだろ？

味については触れない。

ただ俺があいしいと言つたら、千冬先生がすまなそうな顔をしたのは覚えている。

少しずつおじしくなつてきてはいるのはほんのじだな。本当に少しずつだが……

さつきの今日の匂つて言つのはほんのじだ。

こんな毎日が続くせいであの日のことを聞く機会を失つてしまつた。

普通に話に来ているといひに蒸し返すのもばかりしこ。

千冬先生がスウェットの上下を着ているのが新鮮だ。基本的にこの人、スーツかジャージしか着ないしな。

だけど

「大してすることないですよ。少しものをまとめて掃除機をかける程度です」

正直居てもしても「うう」となんてない。

私物がもともと少ないし、整備関係で持ち込んだものは劣化コアを使って収納してある。

むしろ男のロマン本とかの整理なんかがしやすい分居でもらわないほうが……

「それなら夕食を作つていよう。食材も持つてきている」

そう言つて掲げた袋に見えるのはジャガイモや玉ねぎ、その他いくつかの食材。

なるほど。カレー、シチュー、肉じゃがのどれか。

前者2つなら味付けに気を遣わなくて済るので、料理があまり得意でない彼女には最適だろう。

「掃除の後に作ろうと思ったが、そういうことならアル先生が掃除をしている間に作つてしまえるな」

断りにくい……

袋から見える食材は明らかに一人分を超えている。きっと二人分、もしくは冷凍分もあるかもしれない。

この量を千冬先生一人で食べろというのは酷だろう。3・4日同じものだと飽きるし、余った食材で何か別のものを作るとかはまだ苦手だろうしな。

「じゃあ、こ相伴にあずかりますね」

わざわざ食材まで買ってきてくれているのを追い返すのも悪いし「こはお言葉に甘えるよつてよ」。

鍵を取り出しあわせドアノブを回す。

「鍵を閉めていないのか？ 不用心だな」

「特に何かをおいてるわけでもありませんし」

通帳とかは常に持ち歩いてるし、パソコンも量子化している。あるとすれば元々備え付けてあった家電などだが、そんなものを持ち出せるとは思えない。その他は整備室に置いてある。

「教員寮の入り口はオートロックですし、このHHS学園で窃盗なんてまず起こらないでしょう?」

HHS学園の出入りは厳しくチェックされていり、セキュリティのレベルも高い。

「一夏君が来たらきちんと施錠するよ」とありますよ

同居人ができたらさすがにまずいだろ?から直さないとな。

そんなことを考えながらドアを開き部屋へと

「御帰りなさいませ、『主人様』

思わずドアをスッと閉めてしまつた俺は悪くないと呟つ。

あ、ありのまま今起こつた事を話すぜー。

『俺が扉を開けたら、メイドさんに出迎えられた』
な、何を言つていいのかわからぬーと思つが、俺も何をされたのかわからなかつた……

頭がどうにかなりそうだつた……

催眠術とか超スピードとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ……

「あれはなんだ？」

背後から千冬先生の怒気を感じる。

「や、やばい。俺ここで死ぬかもしれない……」

「なんでしょうね、あつはつは……」

渴いた笑いしか出てこない。

あれシャルだつたよね？ なんで俺の部屋にいるの？ なんでメイド服着てるの？

ちなみにメイド服はクラシックなヴィクトリアンメイドタイプだった。

シャルにはちょっと落ち着きすぎている「デザインなんじゃないか？ むしろイレーヌさんとかのほうが似合いそうな……」って混乱しているな、いかんいかん。

「えーと、よく思い出してみるとフランスにいた妹分なんじゃないかと思うんで、きっと日本ではメイド服で出迎えるとか文化を勘違 いしててるんですよ」

「ほう？」

怒気が、怒気が痛い……

「な、なので教えてやらなければと思 います」

「そうだな。正しい日本の文化を教えてやれ

「ではあけますね」

千冬先生に断りを入れてドアを開き部屋へと

思わずドアをバンッと音を立てながら閉めてしまった俺は悪くな
いと思ひ。

あ、あいつのまま今起ひた事を話すぜー

『俺が扉を開けたら、シャルのメイド服が変わっていた』
な、何を言つてこいるのかわからぬーと思つぱるーと

「もう一度聞く。あれはなんだ?」

背後から千冬先生の殺氣を感じる。

「ほんとなんでしょうね、あいつは……」

渴いた笑いしか出てこない。

いや確かに「ヴィクトリーアンメイドタイプはイーネスさんの型
が」とか考えたよ?

だけどそれはフレンチメイドタイプに着替わらつてはいじやなか
つたんだよ?

確かにこいつらのほうが似合つてたけど……

つづか「ほし」とか「おんぶ」とかって感じ取れるものなんだ……

「すいません。おもわす扉を閉めてしましました。今度こそ教えよ
うと思ひます」

「そうしひ。私は気が長くない」

「ではこきますね」

みたびドアを開き部屋へと

「御帰りなさいぴょん！ ご主人様」

思わずドアをド、コオツと音を立てながら閉めてしまった俺は悪くないと思つ。

あ、ありのまま今起こつた事を話すぜ！

『俺が扉を開けたら、シャルがバーになつていた』

な、何w(ゝゞ、

「コ一ホー」

千冬先生が暗黒面に墮ちてしまわれた。

振り向くのが怖いのでドアを閉めた体制のまま話しかける。

「すいません。10分ほどお時間をください。あの馬鹿をとつちめてきますんで」

「コ一ホー」

「何を言つているかわかりませんがOKととりますよ」

「コ一ホー」

「では行つてきます」

「コ一ホー」

早くしろと言われた気がした。

最後のチャンス（俺の人生的な意味で）でドアを開き

「御帰りなさい。」『飯にする？ お風呂にする？ それともわ・た・し？』

シャルは裸エプロンだった。

ドアを閉めようとした反射を抑え込んだ俺を褒めてやりたい。できるだけ千冬先生の視界にシャルが入らないように身体で遮りながら部屋へと入りドアを閉める。

「どうやってここに入つた？」

「鍵かかつてなかつたから普

「ハーフフレームのメガネをかけた口り顔っぽい巨乳の先生があけ

てくれた

おの先生方 父崩に知り人

二ノ丸の御内書

ナビゲーションの場で回数回の操作を繰り返す。

二二二
卷之二

あつた。再び向かい合った瞬間、俺の右手が痺る。

シャルの顔面をつかみ握りつぶすよっこ力を入れる。

「久しぶりに会つたと思ったら人の部屋で何してくれとんじや！？」

いたいただ

「おかげで俺の命が消しとはされるにいたつたせろか！」

今にも私の意識が飛びそういたたたていうがなんでエセ関西弁

! ?

「これは少しOCHANASHIする必要があるのね」「ぎにやあああ

10分後、俺は小さくなっていた。もちろん物理的な意味ではないが……

理由は俺の部屋で制服に着替え側頭部をさするシャルとダークサイドから戻ってきた千冬先生がにらみ合っているからだ。

俺がそれぞの紹介をはじめたときからこんな感じだ。それぞれの背後にトラと龍のスタンドが見える。

俺に出来るのは部屋の隅で小さくこの成り行きを見守ることだけだった。

いきなり一人が同時に俺のほうを向いた。

そしてため息。

え？ 何それ？ 俺何かした？

いきなりのこと俺が自問自答していると一人はなぜか力強く握手をしていた。

「お互いに苦労する」とか「負けません」とかいあつていい。まあよくわからんが和解したようだ。

そのあとは勝手に部屋に入った罰として部屋の片づけをシャルにも手伝わせ、千冬作力レーーライスを シャルも入れた3人で食べて解散という流れだった。

シャルが目ざとく俺のロマン本を見つけ出し、織斑先生に没収されるという出来事もあつたが……

俺は奪還を試みたが失敗。

千冬先生いわく「学園の敷地内にこのようなものを持ち込むな」だそうだ。

そのあとも真っ赤になりながら小声で何か言つていたが小さすぎて聞こえなかつた。

俺のお宝達が……

紙袋に入れられた俺のお宝を持って千冬先生が部屋を出て行こうとする。

シャルは千冬先生が送つていくそつだ。学園の敷地内で何があるとは思えないが、1年の寮長もあるので一応とのことだ。出て行つとして開いていた扉に手をかけたところで何かを思い出したよつに振り返つた。

手首を見せ

「料理をしたときに時計を外したままのようだ。すまないデュノア、すぐにとつてくるから待つていてくれ」

そういうて扉を閉めて部屋の中に戻つて行く。

別に開けておいてもよかつたのに……

「そうだ。最後に聞いておいたと思つたことがあった」

「またですか、なんですか？」

いつもこのパターンだ。

「アル先生はデュノアのことなどいつも思つてゐる？」

「シャルですか？ そうですね。妹みたいなもんでしょうか？」

「じゃあ今日、デュノアがバースーツやら裸にエプロンやらばどう解釈してゐる？」

見られてたか。エプロンのときは隠していただんだが……

「うーん、そうですね。単純に驚かせようとしたんじゃありません？」

「…………あがお前にに対する好意や女性として見てもらいたいと
いう感情の表れとは考へないのか？」

「まさか。シャルは家族みたいなもんですよ。家族に異性としての
感情を抱くわけないじゃないですか」

「そう、そんな感情抱くわけがないのだ。」

「そうか、わかつた。邪魔をしたな」

「いえいえ、こちらこそじちそつをまでした」

「明日から一夏の事を頼んだ。ではな」

「すまないな。待たせてしまった」

「いえそんなには」

扉を閉めテュノアを連れ1年寮へと向かう。

「織斑先生。その本、後で見せていただけませんか」

そういうて指差すのは紙袋の中にあるアルの部屋から没収した裸の女性が写っている本。

「馬鹿者。これは18歳未満厳禁だ」

「先生は後で見るんでしょう?」

「私はもう20代だ、見ても何ら問題はない」

「ズルいですよ、先生。一人だけ情報収集だなんて……」

あの部屋で初めてテュノアと対面した時に奇妙なシンパシーを感じた。

「アルが気付いてくれなくて苦労しているんだな」と……
気がつけば固く握手を交わしていた。お互い頑張ろうと。
だが私も、どうやらテュノアも負ける気はない。
お互いにアルを奪い合う好敵手として認めた瞬間だつた。

「安心しろ。見せることはできないが、どんなものだつたかはいざれ教えてやる」

「本当ですか! 約束ですよ!」

好敵手であるなら条件はフェアに行きたい。
だから私が知った簡単なアルの趣味嗜好ぐらいは教えてやるや。本当に重要なのは秘密だがな。

だがこれは教えておこひ。

おそらくお互いの最終閂門になることを……

「デュノア」

「はい」

「今日のお前のコスプレだがな、あいつはまだ驚かせよ」としてい
ただけだと考へていいそつだ」

「…………本気ですか？」

「ああ、最後に聞いてきた。あれだけされて平然としていたあいつ
があまりにも奇妙に思えてな。そして好意を抱かれているんじやな
いのかとも聞いた」

「ツ先生！」

好意を勝手にばらせば怒りを向けられても仕方がないな。
「すまんな。だがどうしても気になつた。そうしたらあいつはこう
言つた。『家族に異性として好意を向ける奴はいない』とな」

「家族…………」

クネクネしだしたデュノアにきつけの一撃を入れる。

「頬を染めて妄想に浸つてゐるといつ悪いが妹扱いだつたぞ」

「妹…………」

またクネクネしだした。まさかこいつ兄妹で禁断の……とか考
えているんだろうか？

アルよ。ここに家族でも異性の好意を向けそつなやつがいるぞ。
これでは話が進まないので再び一撃を入れる。

「とにかく兄妹のよつな『ユノアから自分に好意を向けられた』ではないと考えているよつだつた」

「やつですか……」

田に見えて落ち込んってしまった。

「だが、私も似た経験をしている」

「織斑先生もメイド服を着たんですかー? 織斑先生ならヴィクトリアンメイドタイプのほうが「馬鹿を言つたな、好意を示したといつことだ」……そうですか」

ふむコスプレか。普段と違つてこひを見せねばもつと私のことを見てくれるだろうか?

いや今はそんなことはどうでもいい。

「その日は焦つていたよつだが次に会つたときにはかなり普通だつたし、今では普段通りだ。好意を向けられた相手とは思つていののかかもしれないな」

あの日、もしキスの話題を振られたら好きになつてしまつたと言おつと思っていた。だが何も言われず、私も恥ずかしさから言いだすことができなかつた。

「これは推測になるが、あいつは好意に気が付いていないのではないか、相手から好意を向けられない理由を無理矢理でも探しているのではないだろうか?」

どう考へても今日のデコノアの行為は家族に対して行つものではない。だがあいつはそれを理由に好意ではないと切つて捨てた。普段の理性的にものを考へるあいつらしくない。

「もしそうなら言つて逃れのできなつべく強烈にアピールするべきだな。たとえば押し倒すとかな」

「おおお、おしたおすつて」

「ただ学生中はするな。私もあいつも教師だ。さすがに淫行は見逃せん」

「わ、わかりました」

顔を赤くしているデュノアを部屋の前まで連れて行き、私は寮監室へと向かつた。

どうしてあいつがそんなことをするのか、私なりの仮説をたてたがそれは教えなかつた。

口に出してしまえばそれが当たつてしまいそうで怖かつた。当たつてほしくなかつた。

アルフォンス・アランが他人に好意を抱くこと、好意を抱かれることを恐れているなどあつてほしくなかつた。

だから私は邪推だ、と切り捨てた。

第7話 邂逅（後書き）

感想で鈍感設定に違和感というものがあつたためもつ少し後で出す予定だつた千冬さんの考えを入れてみました。

「うちのシャルはちょっとオタクが入つてます。

ちなみにフレンチメイドの//スカなビキニとHローブのをわすらしく

オタクが眞づメイドは//ちでシャパンーズメイドとやら//。さすがに一夏君は女子寮に入れられませんでした。
職員寮も//なの?って思われるかもしぬせんが許してください。

次は一夏とシャルの出会いを予定。

第8話 入学（前書き）

遅くなつて申し訳ないです。

土田のじつつかには投稿すると言つたのに……

日曜26時とこいつとで許して貰だせ。

視点移動が2度あつたため今回 side とこいつ方式をとつまし
た。

もつとつまく書ければ……

では第8話じつね。

Side 一夏

右を見ても女子、左を見ても女子……
わかつてはいたぞ。このI.S学園の特色は……
わかつていても同性がいるのはキツい。
さつき幼馴染の篠ノ之箇を見つけたが、目があつたと同時にそら
されてしまった。

薄情者め……

O:どうして俺はこんなところにいるんだろう?
そんな哲学的とも取れるといの答えは簡単だ。

A:本来男が動かせないはずのI.Sを動かしてしまったから

高校入試当日、俺は受験会場となる建物に着いたけどその中で迷子になつてしまい、受験室を探していたら別な部屋に入つてしまい男性が動かせないはずのI.Sを動かしてしまった。

藍越学園とI.S学園つて似てるよな……

なんでこんな紛らわしい名前の学校が同じ建物内で入試をするんだよ!

それからあれよあれよという間に世界唯一の男性操縦者の保護といふ名目でこのI.S学園に入学が決まった。

日本政府からのお達しで俺の意思なんて関係がなかつた。
千冬姉を楽にしてあげたいから高卒で就職率がいいうえ、地域密着型の藍越学園にいきたかったんだけどな。

I.S学園も就職率は悪くないけど家からいける企業つてないしな

あ……

千冬姉といえば最近様子がおかしい。

この前から電話で料理の作り方を聞いてくるよつになつた。

家事を俺任せでほとんど何もできないあの千冬姉が……

できないのは早くから稼ぎに出ていたからだから仕方ないけど、

どうこう心境の変化なんだ？

前に帰つてきたときに俺によくわからない注射（何を注射したか聞いたけどまだ知る必要がないと突つぱねられた）をしたりとよくわからない行動もしてるし大丈夫だろうか？

「……くん。織斑一夏くんつ」

「は、はいっ！？」

いきなり呼ばれて現実逃避の思考埋没から意識が戻つてくる。

「あつ、あの、お、大声出しちゃつて『ごめんなさい。お、怒つてる？ 怒つてるかな？』『ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まつて今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、『ご、ゴメンね？ 自己紹介してもらえるかな？ だ、だめかな？』

おもわず「ちちちえなあ」とか言いたくなる。

背も小さければ態度も小さすぎる。本当にこの人教師なんだろうか？

いや自己紹介はするけどな。

この1年のスタートだ、びしつと決めよう。

最前列なので立ち上がり後ろを振り向くと注目が集まつているのを自覚する。

動物園の玉玉にでもなつた気分だ。

これを毎日されてるとしたら俺は動物園の動物を尊敬するね。

「織斑一夏です。よろしくお願ひします」

簡潔にわかりやすくしたつもりだったが『他には?』とか『それだけじゃないよね』的な視線に少したじろぎながらも息を吸い「以上です」

締めくくつた。

何人かずつこけたがそんなに期待されても困る。

そう考えた刹那

パンと頭を何かではたかれた。

この感じ、まさか……

振り向くとそこには

「げえ、千冬…………ね…………え?」

再び頭に衝撃走る……

「なぜ疑問形だ。自分の姉の顔すら忘れたか? 馬鹿者。それに織斑先生と呼べ」

い、いや、顔は覚えていたんだが、なんというか雰囲気が違つたからとまどつたというかなんというか……

前回会つたときは注射だけしてさつさと出て行つてしまつたから気付かなかつたが、そのオオカミのよつた眼差しが僅かに柔らかくなつてゐる気がする。

いやまた、職業不詳の千冬姉がなんでここにいる?

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言つことはよく聞き、よく理解しろ。出来ないものは出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15歳を16歳まで鍛え抜くことだ。逆らつてもいいが、私の言つことは聞け。いいな」

「この辺りは千冬姉だ。間違いない。」

「Jの発言に対し、多くの生徒から黄色い声援が響いた。
大きく分けて「憧れました」とかの尊敬派と「御姉様」とかの一歩超えちゃってる派があるみたいだ。」

「そんな騒がしい生徒たちを仕方ないなあとほほえましいものを見るような眼で見る。」

「……毎年予期これだけ馬鹿者が集まるものだ。感心をせられるな」

おかしい……

俺の知っている千冬姉だつたら同じセリフをうつとおしげな眼で放つはずだ。

左を見ると筹も田をぱちくつさせていく。

まさか偽物か！

パン！

三度目の衝撃。三度目の正直で防ぐことはかなわなかつた。

「いきなり何を……」

「馬鹿なことを考えただろ！」

「Jの勘の良さは千冬姉だ。」

「一体千冬姉に何が起きてるといふんだ！？」

Side シャルロット

あれが織斑一夏君か。なんというか天然入ってる？

あつ、ポニー・テールの子が連れて行つた。

たしかあの子は篠ノ之簾さん。篠ノ之束博士の妹さんだよね。フランスから今年の入学生で注目すべき人の名前を教えてもらつてゐる。

唯一の男性操縦者・織斑一夏、開発者の妹・篠ノ之簾、あと代表候補生2名。

一夏君と簾さんは幼馴染といつ話も聞いていり。

連れ出したのは旧交を暖めるのにこの教室じゃ騒がしそぎるからかな。

教室よりも廊下のほうが他のクラスの人とかも来るから話しつくいと思うけどな……

私は近くの子とでもお話ししていりよ。

織斑先生の登場で自己紹介も途中で終わっちゃつたし、近くの子だけでも自己紹介しておかなきやね。

チャイムが鳴つて一夏君たちが教室に戻つてきた。席についてなかつたせいでのまた織斑先生に頭をはたかれていたけどね……

2時間目は基礎のおさらいだ。

ここにいる人なら入試で出た内容だし、必読の書類にも書かれていた内容だから問題はない。

問題はないはずなんだけど

「ほとんど全部わかりません」

織斑くんそれはないよ……

いひいひ言いたいことがあるから後で話しかけよ。

2時間目の講義が終わると同時に、織斑くんに声をかけようと席を離れる。しかし先に話しかけた生徒がいた。

イギリスの代表候補生。代表候補生の中でも最も高いBT適正のために専用機『ブルー・ティアーズ』を与えられたイギリスの貴族。

その他にも分かっていることはあるけど割愛。

さてどんな話題を振るのやら……

「わたくしを知らない？このセシリ亞・オルコットを？イギリス代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

「しかたないんじやないかなあ」

思わず声に出してしまった。

Side 一夏

「しかたないんじやないかなあ」

ぼそりと聞こえた声に視線を向ける。

そこにいたのはきれいとかわいいの中間といえる容姿の少女だった。

「あなた誰ですか？」

俺も疑問に思ったことをセシリ亞が代わりに聞いてくれた。

「その質問はさっきの君の質問の答えだよ

「どういうことですの？」

「私はシャルロット・デュノア。フランスの代表候補生だよ。私のことを知らないんだつたら、代表候補生だからって知らなくても仕方ないよね」

「あなたがあの……」

周りにいる人たちも少しがわめいている。どこの人たちかはわからぬけど歐米系の顔だと思つ。

「『ジの』かは知らないけどね。それに I.S 学園には入学式がないから、首席代表で何かをするつてこともなかつたし、調べない限りでは首席つてわからないよ？」

「おお、完璧に論破してくれた。ありがたい。だけど気になる」とある。

「えーと、シャルロットさん？」

「何かな？」

「代表候補生つてなんだ？」

がくりとシャルロットさんとセシリアさんの膝が折れずっこけそうになる。

「代表候補生つていうのは字の『じとく』、国家代表の候補生だよ。ほら、モンド・グロッソとかに出てるのは国家代表でしょ？ その一歩手前の人たちだと思えばいいよ」

なるほど、灯台もと暗しだな。

「『』のクラスに一人もいるつてことは結構な人数いるのか？」

「いや、そんなことはないよ。今年は私たちともう一人だけつて聞いてるしね。本来かたまつているのがおかしいんだよ」

「そうか。次期国家代表つてことはエリートなんだな」

「そう！ エリートなのですわ！」

やつと復活したのか、セシリアさん。

「ですが、フランスの国家代表も大したことないのですわね」

「なんでそんなことが言えるんだ？ ここには代表候補のシャルロットさんしかいないのに？」

「あなたの名前は聞き及んでありますわ。I.S を起動して僅か 2 年で国家代表を倒した代表候補生として。ですが今年の入学試験の起動テストにおいて試験官を倒したのはわたくしだけときであります。つまりあなたは試験管を倒しておられないということですわね。試験管を倒せなかつたあなたが倒したわたくしにかなう道理はありません。となれば国家代表自体大したことがなかつたということです

よ？」「

シャルロットさんってすごいかったんだな。さつきをわかついていたのは、シャルロットさんがヨーロッパのIJS操縦者の中で結構有名だからか。

さつきの発言からセシリアさんの頭の中で強烈なインキンギングはこくなっているんだろう。

セシリアさんへ試験官へシャルロットさんへフランス国家代表

ん？ だけどこれって……

「なあ」

「なんですか？」

「入試つてあれか？ IJS乗つて戦うやつ」

「そうですが？」

「俺も倒したぞ、試験官」

「は……？」

俺の場合は倒したつていうか倒れたつて感じの自滅だつたけどな。わ、わたくしだけと聞いておりましたが？

「女子ではつてオチじやないのか？」

「それに私は起動試験自体受けてないしね

「えつ？」

あれ入試だから全員受けるものじやないのか？

「さつき話に出た国家代表との模擬戦がね入試の日とかぶっちゃつたんだ。元々は問題なかつたけど日程がずれ込んでね」

「それ俺のせいじやないか？ あの後に予定されていた試験とか中斷になつたらしいし。

「IJS学園に確認したらその模擬戦の映像を送れば入試の日程を変えてくれるつて言つてたんだけどこれだけ乗れば問題ないだろうつて判断されて起動試験はパスになつたんだ」

つまりシャルロットさんもかなりレベルが高いつてことか。

一瞬でも疑つて申し訳ない。

キーンコーン

「あ、チャイムだ。織斑くんまたあとで話したいことがあるから」「そう言って自分の席に戻つていくシャルロットさん。セシリ亞さんも渋々戻つていく。

教壇に千冬姉が立つて授業が開始される。

「授業を始める前再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」「

代表者って何ぞや？」

「代表者は行つて見ればクラス長だ。生徒会の会議などにも出る。そしてクラス対抗戦は実力の推移などの指標にもなるな。そのため代表者は通年だからそのつもりで」

「ほうほう、なるほど。任命されるほうは大変だ。

「自薦他薦は問わない。誰かいるか」

「はい！ 織斑くんを推薦します」

頑張つてくれ。織斑さん、応援してるぞ。

「私も織斑くんがいいと思いまーす」

人気だな織斑さん。

「ふむ、織斑一夏以外に誰かいるか。いなければ決定だが？」

「そうかがんばってくれ。織斑一夏さん って俺じゃないか！」

「ちょっと待つてくれ。辞退したい！」

「推薦されたものに拒否権などない」

くつ、にべもなく切り捨てられてしまつた。

「納得がいきませんわ！」

そこで立ちあがつたのはセシリ亞さんだった。

「おお、さつきはあんまり印象良くなかったけど、助けてくれるなら好感度があがっちゃうぜ。」

「ただセシリ亞さんは熱くなりすぎる性格のようで、初めこそ自分のこそが代表にふさわしいと熱弁していたが次第に俺や日本の侮辱になつていった。」

「そこで俺もついイギリスの食事をけなしてしまった。」

「そこから俺とセシリ亞さんで決闘することになつてしまつた。」

「男と女が全力で決闘するわけにもいかないのでハンデを提案した。その提案に周りから爆笑が起つた。」

「男が強かつたのはもう10年以前の話だと」

「笑つていなかつたのは幼馴染の筹ともう一人だけだつた。」

「俺が提案を引き下げるど、むしろ付けてやろうとかとセシリ亞さんが提案してきた。」

「その発言にカチンと来た俺は断り口を開き

「両者が使用する機体を学園の訓練機である打鉄、ラファール・リヴァイブに制限する。これがこの決闘を成り立たせる最低条件だね」「イミングを失つた。」

「シャルロットさん、どういうつもりですか？」

「これがフェアになる条件だと思うんだけどね。専用機で汎用機を無抵抗のキツネのごとく斬りたいって言うのなら話は変わるけど？」

「あなたまでわが祖国を侮辱しますの！」

「私はかなりの日本びいきなんだよ。それをああも侮辱されれば腹も立つよ」

「シャルロットさんって日本びいきなんだ。」

「それよりも専用機とか汎用機って何だ？」

「質問したいけど、じづらいな……」

「あなたも実力に自信があれば自薦なさつてはいかがですか？」 代表

候補生なのでしょう?」

「そう言われているがどうする『テュノア?』」

「織斑先生。私は一つの理由から代表をお受けしたくありません」

「ほう? いってみる」

「まず一点目、クラス代表が実力推移の指標ならばすでにある程度身につけていたり専用機を持っている私たち候補生よりも一般の生徒から選ぶべきだと判断します」

「ふむ、もう一つは?」

「つい先日私は代表候補生筆頭となりました。国家代表に何かあつた際にはフランスに戻らなくてはならないのでクラス代表に穴をあけてしまう可能性もあり、なるべきではないでしょう」

「筆頭つてことは一番上なのか。代表を倒しているんだもんな、当然か。」

「なるほどな。一つ目だけならば以前になつた例もあるため却下していだが、二つ目の事情を考えると仕方がないな」

シャルロットさんはセシリ亞さんに向き直る。

「それでどうするの? セシリ亞さんは専用機? 訓練機?」

「そこまで言われて専用機を使うわけにも参りませんわ。訓練機を使用します」

「よし、話はまとまつたな。勝負は来週の月曜に行つ。各自訓練機の貸し出し手続きを済ませておくよつこ」

「わかりましたわ」

「わかった」

「『わかりました』だ。馬鹿者」

「今日何度もかわからぬ一撃をくらうそれまで考えていたことが吹き飛んでしまつた。」

とにかくまじめに授業を聞こうと思つ。

放課後俺は挫折していた。

難しそうる。

専門用語ばかりで授業についていけない。
これかなりまじめに勉強しないとまずいな。

「織斑くん、ちょっといいかな？」

声をかけてきたのはシャルロットさんだつた。

「織斑くんの同室になる人から君のことを連れてくるよつに言われてるんだよね」

俺一週間ぐらい自宅から通学する予定じゃなかつたつけ？

それに何でシャルロットさんが俺を呼びに来るんだ？

「それはね、その人が私の幼馴染だからだよ

心を読まれた！

「顔に出てるよ」

そんなにわかりやすいのか、俺の顔。

「あと予定より早く入ることになつた理由は本人から話すつて」

「じゃあいつたん会つた後、俺の家まで物を取りに行くつて形になるのか」

「その必要はない。生活必需品は送つておいた。服と携帯の充電器でもあれば十分だろう。足りなければ借りればいい」

そう言って現れたのは千冬姉だつた。

生活の潤いとかはどうなんだろう……

「一人に連れられ、たどり着いたのは「教員用整備室」と銘打たれた部屋だつた。

プシュッと空気圧が変化した音とともに扉が開く。

「アル、織斑くんを連れてきたよ！」

「学園内ではアラン先生と呼べ」

そう言つて奥から現れたのは作業着を着た男だった。

「男！？」

このIJS学園内で男性と会つとは思つてなかつた。
俺の驚きの声に千冬姉があきれた目で俺を見る。

「織斑、まさか女子と同棲するなんて思つてたんじゃないだらうな
？」

「IJSの学園ならあり得るかとも思つていた。

「仕方がないですよ千冬先生。ここに男なんて俺と織木さんしかい
ないじゃないですか」

「確かにそうだな」

ふふふと千冬姉が柔らかく笑つた。

それを見て直観的に悟つた。

千冬姉が最近おかしかつた理由はこのひとだ。

千冬姉に春が来るとは…… 冬なのに春とはこれいかに……
これは弟として祝福しなければならない。
とにかく挨拶からしつかりしなければ。

「姉をよろしくお願ひします、お義兄さ「お前は何を言つているん
だ！」『ゴフッ』

みぞおちに一撃をくらつた後、出席簿で滅多打ちにされる。
千冬姉が恥ずかしがつてゐる！？

痛みと驚きで声が出せない。

「やだなあ、織斑くんは。何を血迷つてゐるのかな？」
シャルロットさんがイイ笑顔でレバーブローを打つてくる。メチ
ヤクチヤ怖いし、痛い。

「えつと、どうしてこんなことになつてゐるのかは分からなが、
とにかく自己紹介をしようか」
わからないなんてなんて鈍感な人なんだ。

お前が言つたなといふ声が聞こえたが気のせいだらう。

「この学園で整備科副主任をしているアルフォンス・アランだ。ちなみに今年やつと日本で酒が飲める年齢だ。フランスじゃ16からだといふのにね」

「つてことは二十歳? この年齢で副主任! ? 若すぎるだらう! ?

「よひしくね」

そう言つて右手を出してくる。

俺はその右手を握り返した。

これが篠ノ之束を超えたと言われ、世界を守りその犠牲になつた男、アルフォンス・アランとの出会いだつた。

第8話 入学（後書き）

一夏に注射したのは体质改善用ナノマシンです。

千冬さんが一夏の毛髪をアルへ譲渡。

それともとにフェロモンを分解するナノマシンを作成。

千冬さん一夏に注射。

ちなみに作成依頼時の会話は

お互いがわかつていながらもぼかして会話するというのをやりたかった。

でも書きたかったけど書けなかつた。

注射器もハイポガンにしたかつたけどできなかつた。

そういうや一夏つて基本名字で相手のこと呼ぶのにヒロインズはいきなり名前呼び（幼馴染組は別として）ですよね。

なんでだろう？

この女はヒロインになるつてわかつてるんだろうか？

次回は「シャル一夏を鍛える」をお送りしたいと考えています

10/24 一夏の他人の呼び方を変更

第9話 テュノア先生のイケナイ？個人授業（前書き）

大変お待たせして申し訳ありませんでした。

ようやく学会も終り、就職も内定が取れました。

これで毎週更新に戻れると思います

私の書くペースがきちんとできればですが……

第9話 テュノア先生のイケナイ？個人授業

「ふざけんなああああああああああ！」

思わず椅子を蹴倒しながら立ちあがつてしまつた。

今は整備科教員の授業前会議中。

普段であればその日のそれぞれの授業を含めたスケジュールの確認と連絡事項くらいで終わるのだが今日の突然の議題はそうさせてくれなかつた。

その議題は「織斑一夏の専用機」について

専用機が与えられること自体はわからなくもない。

織斑一夏の専用機のフラグメントマップなどから「どうして彼だけが男性の中で唯一ISを動かせるのか」などを研究する意味のほかに、自衛の手段という側面もある。

問題なのはその専用機自体だった。

IS学園生徒の専用機は安全性確保のためスペック表が提出されるのが通例である。

元々ISには情報の公開義務があり、その延長線上で基本スペックと武装を申告するだけでよいのだが、提出されたスペック表には以下のように記載されていた。

機体名称 「白式」
開発者 「倉持技研」

重量	不明
航行速度	不明
出力	腕部

脚部 不明

(以下 不明が続く)

特記事項 倉持技研において開発の凍結、廃棄候補であつた機体を篠ノ之束に譲渡。

その後、同人物により織斑一夏専用として開発、完成した旨が日本政府へと伝えられた。

この経緯より最終的なスペックが不明。

倉持技研開発時のスペックは追加資料に記載する。

また篠ノ之束が日本政府に通達した際の映像データも添付する。

これだけでもふざけた話だと思っていたが叫ぶほどではなかつた。なぜわざわざ日本政府に連絡した時の映像が付けられているのかは、わからなかつたが再生してみればその疑問も氷解した。

「はるー！ 世界一の大天才束さんでっす！ 今日はいつくんの専用機ができたからそれを使つよにっていう連絡だよ。もし私が開発した白式以外のIISをいつくんが使うようなことがあつたらどうかの国にハッキングかけてめちゃくちゃにするからそのつもりでね（ハート） 来週には決闘するらしいからそれまでには届けるね！ んじや、ばいび～」

そして冒頭に戻るのである。

「あの（ピー）め……」

俺の篠ノ之束に対する評価はぶつちやけテロリストである。白騎士事件しかり今回のことしかり……

自分の「了見の中では生きていらない人種であり、正直なところ大嫌いだ。

しかしこの声明のせいで一夏君に白式を使わせないということができなくなつた。

これがIIS学園に対してのサイバーテロだつたら俺が防御プログラムを組んでリアルタイムで防御に徹すれば、いかに篠ノ之東であろうとも防ぎきることは可能だろう。

だが世界のどこかへのゲリラ的な攻撃をされる場合、それを防ぐことができず責任が持てない以上、あの（ピー）のいいなりになるしかない。

ちなみに言つておくがハッキング能力では俺はヤツに及ばない。俺の才能はあくまで「ものを作る」ことに限定されているため、プログラムの作成などなら負けることはないが、リアルタイムでの攻防ではどこかの鷹と蜂ぐらいの差がある。

「これは一夏君に謝らないといけないな……」

朝っぱらから最悪な気分だ……

「私にIISの操作を教えてほしい？」

「ああ、シャルロットは代表候補生なんだろ？　コツみたいなものがあつたら聞いておきたいんだ。んで筹建にはIISの基礎知識を教え

てほしい」

午前中、織斑くんに専用機が与えられるといつ話になつて、それから決闘のルールが変更になつた（つて言つても専用機を使うことになつただけだけど）。

そのあとは普通通りにEJS関連の授業を受けて、昼休みになつたから学食に誰か誘おうと思つたら織斑くんに誘われた。隣にいた篠ノ之さんがむつすりと膨れていたのが印象的だつた。

思わず握手して「大変だね」と同情していた。

現在学食。ここでの学食のテーブルの置き方が変わつてると思ったのは私だけじゃないはず……

ちなみに三人とも日替わり定食（塩サバ）

「セシリ亞さん並みに操作してゐるシャルロットぐらいだから、頼むよ」

「うんいいよ。人に教えるつて初めてだからそれだけは勘弁してね」「教えてもらえるつて言ひだけでありがたいのにそれ以上のことは望まないさ」「

一週間で教えられるとしたらセオリーとかかな？

「しかしシャルロット、いいのか？ お前には代表候補生筆頭の仕事などがあるのでないか？」

「予定は入つていないから、急に入らない限り大丈夫だよ。それに多分あつても装備の試験とそのレポートとかだらうじ、教えるのと並行して出来なくもないから平気」

実際、筆頭になつたといえやることはほとんど変わりない。ただ

国家代表に何があつたときに呼び戻されると云つだけだ。

「なら今日からいいか？ 思い立つたが吉田つていうし」

「いいけど、今日はきっと訓練機貸し出してくれないよね？ 一応申請だけしてみてダメだったら私の実演を見るつて形にしようか」

申請にはそれなりの時間がかかるはず。借りられたとしても明日からだね。

「見るだけで意味があるのか？」

「ISはイメージが重要な場面が意外と多いからね。イメージトレーニングは結構重要だよ」

飛行はその最たるものだし、各関節のアシスト機能もただ筋肉の動きからアシストさせるよりもどう動くかを考えてから動かしたほうが無駄が少ないとされていたはずだ。

「そういうものなんだ」

「そういうえば織斑くんは運動は得意？ スポーツとか武術とかやつてる？ 身体の動かし方がわかっている人つていうのはそれなりにISを動かせるって話もあるから少しだけ有利らしいよ。武術とかも呼吸とか感覚の面で補助になるしね」

多分これもイメージの問題なんだと思う。各部の動きをしつかりと認識しているかどうかの違いなんじゃないかな？

「あー、中学では帰宅部だつたな。小学校のころは剣道やつてたけど「どうこう」とだ一夏！」 おわつ！ いきなりどうしたんだよ、第？」

「剣道を続けなかつたのか……」

「千冬姉が働いてたからな。自然と家事を俺がやることになる。そうなるとどうしても時間が足りなくてなあ」

「時間というのはあるのではなく作るものだ」

語気が弱くなつたのは織斑くんの苦労を察したからかな。

「戻す」

「は？」

「ここにいればお前は家事をする必要もない！ エラ学園にいる間にお前を剣道をやつていたこの状態まで戻す。いやそれ以上に鍛えてやる……」

なるほど。剣道は織斑くんと篠ノ瀬さんの絆みたいなものだつたんだろう。

それを続けていなかつたといつのは篠ノ瀬さんにとって裏切りにも感じられたのだね。

だからさつきはあんなに激昂してたんだ。

「いや！ 僕はお前にエラの基礎を教えてもらおうと……」

「そんなもの。シャルロットに教えてもらえー。私は誰が何と言おうと貴様を鍛えなおす……」

「いやいやいや、そんな無茶苦茶な……」

そんな彼女の意見を織斑くんはあり得ないと言いたげだが私は違つた。

「ありかも」

「えええ！？」

「織斑くんてさ、ガソリン車がどうして動くか知つてる？」

突然の話題の転換に織斑くんが虚を突かれた表情をする。

「えっ？ それはエンジンでガソリンを燃やして……」

「エンジンの中でガソリンはどう燃えてるのか知ってる？ 燃えたのをどうやって前進させるために使ってるか知ってる？」

私が何を言わんとしているのかをわかつたのだろう。

織斑くんの顔には納得の表情が浮かんでいる。

「つまりはそういうこと。細かな原理を知らなくても車の運転はできる。運転技術さえあればね」

私たちが扱うのはものがものだから知らないままっていうのはまずいけどね

「基礎を後回しにしてこの一週間を徹底的にセシリニア戦に向けて特訓させてもいいかも。それに決闘が終わってから基礎を教えたほうがわかりやすい部分があるかも知れない」

「なるほど。ではそうするか！ そういうことだ一夏！ 私と剣術、シャルロットとはE-Sの訓練だ」

「ちょっとまて、俺は認めて「ではシャルロット、今日の予定だがどうする？」もうこいです……」

織斑くん、とうとう話すら聞いてもうえなくなっちゃった……

「あはは、私のほうは申請したり準備がいるし今日は大したことをするつもりはないからそっちが終わってから30分もあればいいかな」

「ならば一夏、放課後はまず剣道場でお前の今の実力を見るからな

！ 覚悟しておけ！！」

「はい……ありがとうございます……ます……」

もうすでにいつぱいになつてゐる……

織斑くん強く生きて……

そんなこんなで放課後。

私はアルから人の少ないアリーナがどこかを聞いてそこと専用機の使用申請を提出しておいた。

校舎と寮から一番遠いこのアリーナは第6アリーナのように特徴があるわけでもないのであまり使われていないことだった。アルにこのアリーナのことを聞いたときにあるお願いもしてきた。メールでここを使いつてわざ送つたから後は織斑くんが来るのを待つだけだ。

軽くラピッドスイッチの訓練をしながら時間を潰していると織斑くんと篠ノ之さんがあつてきました。

「おっ！ それがシャルロットの専用機なのか？」

「うん、名前は『ロンド・オアラジュー』。フランスの第3世代だよ」

「へえ。……だけどコレどつかで見たことある気がするんだよなあ」「一夏もそう思つたか。私には入学試験の時、教員陣が付けていたISと同じに見えるのだが……」

「それは第2世代の『ラファール・リヴァイブ』だと思つよ。デュノア社が卸していたはずだしね。性能はこっちのほうが上だし、アンロック・ユニットもついてるから能力面では比べられないけどね」「アンロック・ユニット？」

「まあその辺はおじおい。訓練機はやっぱり借りられなかつた？」

その辺の説明をしていると寮の門限に合図わなくなるしね。そして彼は鞄のほかに何も持つてきていないしISを着けているわけでもない。そんなにすぐ借りられるとは思つていなかつたが次の彼

の言葉は予想外だった。

「それなんだけどなんか貸し出しが制限されてるらしくて、来週まで乗れる日がないみたいなんだ」

「それはまずいね……」

ちょっとこれは予想していなかつた。ISは基本的に乗つた時間がものを語つ。最低でも明後日からは借りられると思つたから今日と明日で基本的な動きを見てもらつて明後日から実際の動作、前日には対策を練つてそのシミュレートをしようと思っていたのに……さすがに『ロンド・オアラジュー』のパーソナルデータいじつて乗つてもらうわけにはいかないし……

「ないものねだりしても仕方ないか……」

「訓練機は借りれなかつたけどやれるだけのことはやりたいと思つだから頼んだぜデュノア先生」

デュノア先生

その言葉はとても心地よく響いた。もし将来IS学園で教鞭をとればアルと同じ職場！！

教員同士での職場結婚なんていうのもいいなあ……

つといけないいけない、そんなこと考えている場合じゃなかつた。

「じゃあ個人レッスンを始める前に一人に聞いておきたいことがあるんだ」

一人がなんだろうと首をかしげる。

「HURつて何だと思つ?」

その間に答えたのは篠ノ之さんだつた。

「宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。いままではスポーツなどにも利用されているが結局のところはパワードスーツだ」

教科書通りの答えといつていいだろ。テストであれば点数が貰える答えた。

織斑くんもうなずいている。今田の授業でも言っていたし同じ答えみたいだ。

「私の答えは違うんだ」

ISにある程度以上乗つたことのある人はきっとそうは思わない。特に代表候補生や国家代表は。

言うと同時私は両手にアサルトライフルを出現させると一人へ突きつける。

「なつ」
「なにをする！」 シャルロット！」

織斑くんは驚いて硬直するだけなのに対し、篠ノ之さんは一瞬銃口から体をすらそつとしたがして無駄だと悟ったのか抵抗をやめた。

「今二人に向けているのは、多くのISが搭載しているアサルトライフルだよ。もし本当にマルチフォーム・スーツだったらこんなも

のはいらない。スポーツでも殺傷力なんてものは必要なはずがないんだ。元々は宇宙用に開発されたスポーツだったかもしない。だけど今では違うんだ。多くの国で軍事力の要として、兵器として進化を続けているものなんだ」

「篠ノ之さんにはつらい」とかもしれないけどね」と付け足す。実の姉が開発したものが兵器であるなんて言われたらショックだろう。

IIS学園の生徒を見ていて思ったのは意識の低さだった。へらへらと笑いながら専用機がほしいなんて言えるものじゃない。

私もあの日までそれがわかつていなかつた。わかつたつもりできちんと理解していなかつたと言つたほうが正しいかもしれない。自分を殺す武装を向けられたあの日までIISは安全だと慢心していた。

「私たちが扱おうとしているのはそういうものなんだ。その参考書を電話帳と間違えて捨てました？ ふざけるな！……」

びくりと織斑くんの背筋が震えた。

私は量子化してアサルトライフルをしまつ。
二人がほつと息をつく。

「いきなりライフルを向けてゴメンね。私が操作の前に教えておきたかったのはそういうこと。自分が扱うものの大きさを知つておいてほしかつたんだ」

「いや、教えてもらつてよかつた」

「ああ。戈を止めると書いて武。よく言われることだが実際に戈を向けられて初めてその恐ろしさがわかつた」

「先生いきなりこんなスバルタで行くような私でいいかな？」

「俺はむしろそんなシャルロットにこそお願いしたい。学校で習つ

」とよりも大事なことを教えてくれそうだ」

「だがさつきのは大丈夫なのか？　ISも付けていない相手に銃を突き付けたなんて話はまずいだろ」

篠ノえさんが心配そうに気遣つてくれたがそれについては心配無用だ。

「それは大丈夫だよ。今このアリーナの監視カメラにはダミー画像とダミー音声が流れでてここであつたことはわからぬ」よつになつてゐるから」

篠ノえさんがどうやつてそんなことをしているか聞いてきたけど「禁則事項です」で押し通した。

さすがに銃を生身の人間に向けている場面が管制室とかに流れたら問題になるからアルに頼んでちょっとだけいじつてもらつた。

きつとアルは問題が起つたときのためにこの画像を見ているんだと思う。

「ゴメンねアル。今度なにかお礼しに行くからー」

「じゃあ改めて始めようか」

そう言つて私は飛び上がる。

デュノア先生の個人授業の始まりです！！

一週間篠ノえさんが剣道の勘を取り戻させ私とエリの授業を続け

そして決闘の時を迎える。

NGシーン

「一夏君に謝りに行くか」

昨日決闘するつていう話になつてたし早く伝えたほうがいいと思い
すぐに彼の教室に向かつた。

そこから聞こえてきたのは千冬先生の声。

「そうだ。篠ノ乃是あいつの妹だ」

その声に爆音とも言えるような声が響き渡る。

俺は思わず劣化コアからあるものを展開し教室内へ踏み込み

「なに生徒の個人情報をばらしとるかあ！」

展開したハリセンで千冬先生をはたいていた。

「アル先生！？ いつたい何を！？」

「正座」

「あのアル先生……」

「いいから正座！」

しぶしぶ正座した千冬先生に俺は個人情報についてのお説教を10分にわたりすることになった。

NG理由

正座をはじめいろいろと。

NGシーン2

「アラン先生はなんでここに来たんですか？」

一 夏君が質問をする。

俺はそれにこたえようとしたが一夏君の後ろの生徒が彼の背中をついているのが目に入った。

「ねえねえ織斑君あの先生のこと知ってるの？」

「ああ、この先生の部屋で生活させてもらひつてこなったんだ」

「さすがに会いには行けないかな」

「くつ！ なんという試練を神は私たちに『ねえたもつた！』

「教員と生徒が一つ屋根の下k t k r！」

「夏は無理でも学園祭までに何とか仕上げないと……」

最後の一人ちょっと待ちなさい。

「アルが攻めだよね。私にも一冊

シャルロット……

「アル先生が攻めだと…… 生徒の出すものの検査が必要だな。私にも一冊よこせ」

千冬……先生……

NG理由

シャルロットH

千冬先生H

第9話 テュノア先生のイケナイ？個人授業（後書き）

人に銃を向けちゃイケナイと思います（笑）

ちなみに一夏がシャルと篠に教えてもらうように頼んだのは
1時間拘束しそうのが申し訳なかつたから
2束の妹だしそこそこ基礎知識は持つてゐるだらう
と考えたからです。

次回は決闘回になると思います。

第10話 決戦、第3アリーナ（前書き）

はつきり断言します

今回の話、批判が多かつた場合改訂します。

期限は一週間で

一夏、どうじてこうなった

第10話 決戦、第3アリーナ

俺、千冬先生、一夏君、篠ノ之わん、シャルは第三アリーナのピットで一夏君の専用機が来るのを待っていた。

俺がここにいるのはこれから来る専用機のセッティングを行っためだ。

いくら整備科の副主任とはいっても、勝手に他国の最新鋭専用機をいじくりまわすことはできない。

搭乗者と開発元に許可を得られなければEHS学園の整備士でもその内部に触ることは禁止されている。

国によっては専門の整備チームが派遣されることもある。

倉持技研にどうするのか問い合わせたところ「整備チームの派遣はしないのでそっち側で適当にやってデータだけほしい」などとおっしゃられたので俺がやることになった。

『打鉄』を見ればそれなりの技術力があるとこだがこんなことを言つような企業はそのうち潰れるだろうな。

一夏君にはすでに許可をもらつてこりで両者の許可をもらつた形になる。

なるのだが……

「いなー……」

決闘前には届けると話しだったのにもう20分もない。

「あの（ペー）共ぬ」

俺の中で倉持技研の株がストップ安と化していた。

本当にあいつらは I.S 造つて いるといふ自覚があるのだろうか？
そんなことを考ながら搬入口を眺め続けていたがそろそろ限界だ。

「織斑君、ついてきてくれ」

俺は立ち上がりピットから出て行こうとする。

学校なので呼び方は織斑くんだ。

「えつ、どこに行くんです？」

「I.S 学園の搬入口だ」

「この学園には搬入口が一つしかない。

機密を扱う以上人員のチェックをする必要があり、あまり多くの出入り口を作つていないので。

「搬入口で積み荷のチェックをするときからファイットティングなどを開始すればここに搬入されるまでの時間を短縮できる」

限界とは俺が機体の整備をしながらファイットティングの手助けができる最短の時間だ。

それをもうすぐ切つてしまつ。

幸いこのアーニーナまでは一本道のためすれ違いになることもない。

「わかりました」

そう言って一夏君は俺についてきてくれた。
うん、素直でいい子だ。

俺たちが走りながらＩＳ学園の搬入口まで行くと、トラックが積み荷の検査をしていった。

そのサイズからして積み荷は一夏君の専用機だろう。

「織斑君あれだ。おーい、そこのトラック、コンテナの扉を閉めるのを待つてくれ！」

思いつきり不審者を見るような顔で見られたけど無視する。

俺は胸ポケットから身分証明書となる手帳を取り出して話しかけた。

「私はＩＳ学園整備部副主任をしているアルフォンス・アランだ。こちらは見たことあると思うが織斑一夏君だ。この積み荷は彼の専用機で間違いないか？」

トラックのドライバーはわからないといった顔をしている。どうやら倉持の人間ではなくただの運転手のようだ。

「はい。積み荷を検査したところＩＳでした。本日の搬入予定でＩＳは織斑一夏の専用機だけです」

そう答えてくれたのは警備員の女性だった。

ちなみに彼女は琉球武術をやつているとかでその辺の男では相手にならないそうだ。

「ちょっと失礼するよ」

俺はコンテナに乗り込み白式にコードを接続する。
まず見るのはフィットティングに関するデータ、それに平行して危険な部分がないかを確認する。

結果フィットティングは問題ないようだ。

「織斑君、これに乗つてくれ」

「えつと、わかりました」

一 夏君に乗り方を説明しながらパーソナルデータの入力を進めていく。

「あの一体なにをしているんですか？」

「そうたずねてきたのは警備員さん。

答える時間すら惜しいがこれくらいは答えないといけないだろ？

「ああ、すまない。時間がおしているのでここからセッティングをしていくことになった。私たちを乗せたままでいいのでこのコンテナを運びこんでくれ。」コンテナの扉は閉じてい。パソコンの画面の光だけで十分だからね

そういうながらも俺の目線は設定用に開かれた画面から動かしていない。

「えつと」

ドライバーの青年はじつしたものかと迷つてゐるようだ。いきなり表れたかと思えば乗せて行けと言わればそつなるのも無理はないが時間がない。

「早くしないか！？」

怒鳴りつけるなりして会話を終わらせ扉を閉めさせる。

トラックが動き出すのを振動で感じながらも進めるのはシールド関連のパラメータの確認。

— 夏君にいくつかの質問をしながら設定をいじつていぐ。

(時間が足りない)

さすがは篠ノ之束特製といつべきか。
設定が非常に複雑だ。

普通の機体ならばすでにチェックは終わっている。
これは俺の読み違いだった。

あの篠ノ之束がそんなものを造りこねるはずがないとこうの……

「織斑君」

「なんでしょう? アラン先生?」

「予想以上に時間がかかっている。どうしても5分ほど足りない。
何とかして試合の開始時間を遅らせることができないだろ?」
「それは無理だと思います。アリーナも使用時間がありますし、何
よりセシリアさんが何を言い出すか……」

「どうか。ならば仕方がない。パラメータの設定などはできたから
後はシステムに任せればいい。とにかく最初の5分だけなんとして
も逃げ切ってくれ。そうすればファーストソフトに移行できる
「それならちよづじい」
「ちよづじい?」

「ええ、今日の戦略プランの第一段階が逃げ回ることなんですよ」

— 夏君の話ではまずは慣れるために徹底的に逃げ回りながらHS
の動かし方を確認するのだといつ。

コンテナの扉が開けられたのはそのあとすぐだった。

田の前にはアリーナのピット直通の搬入口。まだファーストシフ

トもしていなかったため待機状態にすることができず、IJの搬入口から入っていくしかない。

トラックの運転手にねぎらいの言葉をかけ、一夏君と搬入口へと入っていく。

初めて入った搬入口の内部はベルトコンベアのようになっていた。立っているだけでピットまで連れて行ってくれるようだ。

しばらくするとベルトが停止した。そこには斜めにかみ合ったタイプの防壁扉が開かれると先程部屋に残してきたシャルたちがいた。

「それで調子のほうはどうだ」

「一応安全性の確認は終わっているんでシールドと絶対防御は発動します。その他のパラメータも織斑くんに合わせていじつたんで問題ないでしょう。ただフィットティングは終わったのですがパーソナライズが終わっていないのでファーストシフトまでもう少し時間が必要ですね」

「その程度なら仕方がないか。準備不足は否めんが死なないなら問題はない」

「いや問題ありますよね」

千冬先生の過激な発言に思わずツッコんでしまった。
ほり、織斑くんと篠ノえさんがヒいてますよ。

「IJの治療施設は世界的に見ても高水準だ。多少の怪我なら大丈夫だ」

「いや、やつは言いますがね」と

各部分の確認と手動で設定できる部分がやっと終わった。
白式からコードを抜いていく。

「織斑くん。俺が今できるのはここまでだ。後は君の力でどうにかするしかない」

「アラン先生。ありがとうございます」

「織斑くん。プランはあくまでプランだから臨機応変にね」

「シャルロットも、今日までいろいろ教えてくれてありがとうございます」

「一夏、勝つてこい」

「幕。一週間俺につきつきりで剣道仕込みなおしてくれて感謝して

「がんばれとは言わん。それは知っているからな。だから勝つてこい」

「ああ、千冬姉。行つてきますー！」

みんなが一言ずつ声をかけて一夏君を見送る。

ゲートから一夏君が飛び出していつたのを確認して俺は質問をする。

「織斑くんとセシリ亞さん。どちらが勝つと思ひ？」

その質問に答えたのは織斑先生とシャルだった。

「オルコットだらうな」

「セシリ亞せんだらうね」

一人から出た名前はセシリ亞・オルコット。やはりそうか。

「なんだと、それではシャルロットが今まで教えてきたのは無意味だとそういうのか」

その答えに篠ノ之さんがあざわらが詰め寄つた。

「やつはこつていなこよ。」の一週間で教えたことは今日負けても身になるからね。でも今口勝てるかとそれは別だよ

「そうだな。篠ノ之、お前は代表候補生といつもの不甘く見てている。仮にもオルコットはイギリスのトップから數えたほつが早い位置にいるつえ、軍隊で訓練してもいるはずだ。ポツとでの織斑よりもさまたまな面で上にいるのは間違いない」

「そんな……」

シャルと千冬先生の断言に言葉をなくしつなだれてしまつ篠ノ之さん。

「だけど織斑くんが勝てる可能性がないわけじゃない」

「えつ」

「ISの戦闘の勝敗を分ける要素、教えたよね」

「操縦者、機体、時の運……」

「そう、操縦者はセシリアさんのはうが上。だけどほかの要素でどれだけ巻き返せるかはまだ分からないよ」

「あら、逃げずに来ましたのね」

田の前にはセシリア・オルコットの乗る《ブルー・ティアーズ》

がある。

ティアーズモデルの特徴は自立機動兵器。ヨーロッパのイギニッシュ・プランでシャルの乗る《ロンド・オアラジュー》とともに正式採用される、中距離での運用はかなり強力な機体だという話だ。（《ロンド・オアラジュー》は近接兼防衛の要らしい）

彼女が手に持っているのは一《スター・ライトmk?》。こちらには向けられていないがいつでも射撃に移れる体制ではあり油断はできない。

「最後のチャンスをあげますわ」

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくってよ」

「そういうのはチャンスとは言わないな」

「そう？ 残念ですわ。それなら お別れですわね！」

独特の音がして俺の体を打ちぬかんとレーザーが奔る。

《スタートライトmk?》の動きに注目していたから何とかよけられたが次は怪しいな。

計画の第一段階を開始しよう。

「あれがお前たちの計画の初めか。有効的なのは認めるな」

ピットでそうシャルに語りかける千冬先生。

織斑くんの逃げ方はいたつてシンプル。可能な限り地面から離れず背中をアーナのシールドに向けそれぞれ1メートルぐらいをキープ。

あとは可能な限りそれを維持しぐるぐるアーナを回るように攻撃をかわすというものだ。

「ハイパーセンサーは360度を見渡すことができるがそれをするのは人間だ。真下や真上、背中は反応が遅れがちになる。そのうち2方向からの攻撃を防ぎつつ上からの攻撃を警戒させることでハイパーセンサーの処理技術を身につけさせる。いまの織斑にできるオルコット対策としては上出来な部類だ」

壁際にいると不利なのではと考えられるかもしれないがISではあまり関係がない。あくまで壁際の不利とは前後の動きが封じられ行動範囲が横に絞られることだ。しかしISでは縦の動きが可能のためそのような不利は減る。

それに織斑くんの素質が意外といい。被弾しているがそこそこの割合で避けられている。

自立機動兵器の位置把握もきちんとできていてかわすだけだがなんとかなっている。

そしてそろそろ

5分だ。

フォーマットとファイットティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

やつとか。とてつもなく長く感じられた5分が終わつた。

確認ボタンを押すと膨大なデータが処理されていくのがわかる。そしてISが光の粒子へとほじけ再び形成される。

その姿は今までの形状よりもなめらかなものであり中世の鎧を思わせた。

これが俺専用のIS—《白式》か！

「ま、まさか……ファーストシフト！？ あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦つていたといつのー？」

今はその言葉を無視する。そんなことよりこの機体を確認しなければならない。

まずはセシリ亞と同じ高さまで上がる。

思った通りの速度で動き、思った通りに止まる。

さっきまでは幾分か機体に振り回されていたイメージがあるからすぐくしつくりくる。

さらに武装のリストを開き確認する。搭載されている武装は一つしかなかつたがこれ《・・》ほど信頼できるものはない。

「初期設定なんかじゃなかつたさ」

「なんですつて」

「アラン先生が僅かな時間だつたけど整備してくれた」
わざわざコンテナまで向かつて手助けをしてくれた。

「シャルロットが戦い方を教えてくれた」

ISとは何かから、今日の戦略まで力を貸してくれた。

「幕が勘を取り戻させてくれた」

間合い、呼吸、そんな忘れかけていたものを戻してくれた。

「そして最高の姉の力がここにある」

取り出されるのは一《雪片式型》。

かつてモンド・グロッソで千冬姉が総合優勝した時に振るつた武装《雪片》。おそらくはその後継。

「これだけの人たちの力を借りて負けるわけにはいかない！」

「わかりました」

「ぽつりと漏れたそれはハイパー・センサーなど使わなくても俺に届いた。」

「あなたに譲れないものがあるのはわかりました」

でも、とセシリアは続けた。

その時はじめて彼女は俺を見た。

格下の男ではなく、無謀な挑戦者でもなく、世界でただ一人の珍しい男でもなく

「わたくしも負けるわけにはいきませんわ」

対等な相手として俺を認識した。

「あの馬鹿者、せっかくの勝つチャンスをドブに捨てたな」「確かにそうですね。セシリアが油断していればそれだけ勝ちやすかつたわけですけど……」

「なんだ、デュノア？ 言いたいことがあるのか？」

「織斑先生、うれしいんですね。最高の姉とか言われて

「なっ、なにを言つ！？」

「ほつぺたゆるんですよ」

「なっ」

「そつやつてほつぺたを押さえるのがいい証拠です」

「デュノア、覚えておくといい。私は身内のことだからかわれるのが嫌いだ」

「ひつはらないふえ、ほつへはひつはらないふえふふあふあい（ひつぱらないで、ほつぺた引つ張らないでください）」

プランの第2段階は相手の性質をよく知ること。

さつきまでの攻撃でビットの数が4基まであることはわかった。まだあるかもしれないのに決めつけることはしないが背中のフィンは少なくとも4基しかないよつだ。

そしてシャルロットからの助言を思い出す。

『ビットの操作?』

『三次元的に動作した上に、敵をとらえて射撃をするなんてプログラムそろそろできるものじゃないからね。セシリアが動かしているというのは間違いないと思うよ』

『それが今回の作戦にどう影響してくるんだ?』

『うん、多分だけどビットの操作はセシリア本人がしているから操作している間はあまり動けないか本人からの攻撃が少ないんじゃないかと思うんだ』

『よくわからないがそういうものなのかな?』

『ビットの操作はかなりの集中力を使うはずだからね。少なくとも複雑な軌道はできないよ』

実際『スター・ライトmk?』を撃つ時はビットは動かないか、精度の低い援護射撃をしてきていた。

この推測は当たつているだろつ。

次のビットの動作と同時にこちらから仕掛けれる。

大丈夫だ。もし一『雪片式型』が一『雪片』と同じ力を持つているなら一撃で倒すことも可能なはずだ。

格闘系のISの動きを録画映像を見ていたときにシャルロットに教えてもらつたことが眞実ならば……

『一『雪片』が特殊な能力を持つてゐる武装?』

『そうだよ。一『雪片』はバリアを中和もしくは無効化する力を持つていたはずなんだ。多分ワンオフ・アビリティーだと思つんだけどね』

『ワンオフ・アビリティー?』

『ISの特殊能力だと思えばいいよ。とにかくそれが一『雪片』を媒介に発動してゐたんだと思つよ』

その時は雑談の一つでしかなかつたが今となつては値千金の情報だ。

それに欠点も教えてもらつた。

モンド・グロッソでは不正の無いように今のようにシールドエネルギーが数値化されているのだが、千冬姉が一『雪片』を使うと千冬姉側の『・』シールドエネルギーが減つてゐたそうだ。つまり一『雪片』は様々な面に使用されるマルチプルエネルギーではなく防御用のシールドエネルギーを攻撃に転化していたのではないかといわれてゐるそうだ。

つまり超短期決戦型。

だがこれは朗報である。

俺とセシリ亞の地力にはかなり差があるだろう。

長期的な戦闘では間違いなく操作能力が上のセシリ亞が勝つ。

だけど特攻をしかけるような形でひつかきまわせば俺にも勝ち田が出てくる。

じつと相手が動き出すのを待つ。

そしてその時が訪れた。

背面に陣取つていたビットから熱量を感知したと同時にセシリニアへと最高速で突つ込む。

କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର

大上段からの一撃をセシリ亞めがけて振り下ろす！

「あなたがカウンターを取りに来ることは予測していましたわ！」

『ブルー・ティアーズ』の腰部から延びるスカート状の装甲から射出されたミサイル型のビットが俺に向かってくる。回避も間に合わず俺はそれに直撃した。

回避も間に合わず俺はそれに直撃した。

ブルー・ティアーズ

黙黙押しつけかりにセシリアかハイバー・センサーを頼りに爆炎の中へとレーザーを放つ。

がそんなことは関係がなかつた。

とにかく數で攻めきNo

この強敵の負けが決定するまで攻め手を止めない。

それだけがセシリアの戦略だった。

ハイパー・センサーに映る織斑一夏の位置情報が自分に向かい急に

加速していく。

セシリアは余裕を持つて『スター・ライトmk?』を構え迎撃し

ようとした。

爆炎から抜けた織斑一夏に照準を合わせ発射する。
しかしそれを一夏は回避する。

一夏は再び大上段の構えだ。まだミサイルは使えない。仕方なしに腕部の装甲で防ごうとした時に脳内で警鐘が鳴った。

あれを装甲で防いではないと
セシリアはそれに従つた。

理詰めの考え方をするセシリアからぬ考え方であつた。理由もなく勘に従うなど。

「《インター・セプター》……」

初心者用の名前を呼ぶといつ武装の呼び出し方も気にならなかつた。

ただ勝ちたい。それだけのために

「勝者 セシリア・オルコット」

そのアナウンスが響いたのはインター・セプターで雪片式型を受け止めた直後だつた。

攻撃を与えたわけでもないのにそのアナウンスが放送されたことを不思議に思いながらもインター・セプターを量子化する。

そしてBペリットへと戻る。一瞬見えた織斑一夏の顔はきっと忘れないとばかり。

部屋でシャワーを浴びながら考えるのは今日の試合のことだつた。試合に勝つた。それはいい。だがどうしてもE-Fを考えてしまつ。

もし最初からファーストシフトした機体だったらどうだったかもし織斑一夏がファーストシフトした直後の動揺していたときに攻めてきていたら

もし最後の攻撃を腕部で受けていたら

そんな考えがぐるぐると頭を回りどうしても勝った気がしない。なんとも後味が悪い勝利だった。

Aピットには一夏だけが残っていた。他のメンバーは千冬が連れて行つた。落ち着いたらアル先生の部屋に来い、待つていると言われ、一夏だけがここにいる。

「勝ちたかった」

ぽつりと漏れた言葉が自分が負けたことを改めて思い知られた。

「ああああああああああああああああああああああああ」

その歎哭は誰にも聞こえることはなかつた。

翌日のショートホームルームで副担任の山田先生から

「では1年1組代表は織斑一夏君に決定です。あ、1繋がりでいい感じですね」

と伝えられた。

これだけは聞いておかなければならない。

「昨日俺セシリ亞に負けたんですけど」

「わたくしが辞退したからですわ」

それに答えたのはセシリ亞だった。

いろいろ言われたが要約すると
代表は実戦経験の宝庫だが、自分はイギリスでそれなりにこなし
てるからいまさら実戦を増やす意味があまりない
ということらしい。

「わたくしに勝ちたいのであれば経験を積むことですわね」
この一言が決定的だった。

織斑一夏クラス代表に就任しました！

第10話 決戦、第3アリーナ（後書き）

多分まともにセシリ亞が一夏に勝つた一次創作ってそういうんじゃない
じゃないだろうか？

ぶっちゃけ原作の一夏ができすぎです。
まともに車に乗ったこともない人物がF1ドライバーに肉薄するな
んてありえないかな、と……
戦略に関して突っ込みたいところがあるでしょうがご勘弁を……

少し修正しました

追記

感想で特に批判がなかつたためにそのままにします。

第1-1話　日常と酢豚（前書き）

更新が遅れて申し訳ないです。

昨日が忙しかったもので……

多分来週も火曜日投稿になると思います。

そして今回は非常に短いです
3000字くらいしかない……

第1-1話 日常と酢豚

「最っつ低！ 女の子との約束をちやんと覚えていないなんて、男の風上にも置けないヤツ！ 犬に噛まれて死ね！」

その日アリーナに乙女の怒りが炸裂した。

その日教員寮に帰つたのは21時を回つたころだった。

近々あるIS学会の発表用資料を作成していたらこんな時間になつてしまつた。

IS専門の研究発表の学会はそれなりに開かれている。
ISは世に出てからまだ10年ほどしか経っていない。
しかも自己進化機能とブラックボックス部分のせいでわかつていなことが多い。

そんなわけで知識を共有しISの研究を進めようと言つのがこれらの学会の要旨だ。

ほとんどの参加者はIS関連企業専属の研究者たち。それに俺たちのような整備関連の人間や実際の操縦者が混じつてると言つた感じだ。

研究者のほうは企業秘密の関係ですべての情報を発表してくれるわけではないが、予想外の視点からの発表もあるのでなかなか面白い。

去年、そんな発表を聽講するついでに俺の発表もしていった結果が今部副主査という立場である。

俺にものづくりの才能があると言つてもそれは万能じゃない。自分で考えつかなかつた視点というものはどうしても出てくる。それを補完するために様々な論文を読むし、学会にも出るわけだ。その自分の視点だけでも黒騎士のよつた現代技術を超えたものを造れてしまうわけだが……

こんな風に学会の準備に時間が割けるのも整備科が平和である証拠だ。

なんでも普通教員のほうでは中国から代表候補生が転校してくるとかいう話でてんやわんやらしい。

2組への転入らしいが今日聞いた話ではクラス代表の座も奪い取つたらしい。

かなりアクティブな子のようだ。

だが整備科はきちんと書類が提出されているのでなんの問題もない。

整備もきちんと中国から整備班を定期的に送つてくれるそつだ。うん、倉持とはえらい違いだな。

「ただいま」

「あつ、アラン先生お帰りなさい」

椅子に腰かけていた一夏君から返事が返つてくる。

ここに寮は広い。

小わめのダイニングテーブルやそれぞれのベッドと机をおいても、各人のスペースを取れるぐらいの広さはある。

IDS学園さまさまだ。

それにしてもひつひつたあこがれを返してくれる人がいるのっていいね。

「ちゃんと夕飯食べました？ おかげなら作り置きが冷蔵庫に入つ

てますけど」

「いや、多分今日もおかずが残つていると思つたからまだ食べていないんだ。頂くよ」

冷蔵庫に入れられていたのは酢豚と春雨のサラダだった。じつはこれ千冬先生が作ったものである。

毎週2日ほど一夏君は千冬先生に連れ去られていく。

そして戻ってきたときには何らかのおかずをお土産の「」とく持つて帰つてくる。

初めは一夏君が作ったものなのかと思つたが、ある時一夏君が作ったものを食べる機会があつた。それが持つて帰つてくるものよりも上手にできていたので消去法的に千冬先生が作ったものとこいつになるとになる。

一夏君が拉致されるよつになつてから千冬先生が作つてくれるお弁当もおいしくなつたしな。

ちなみにそれ以外の日は基本食堂で食べている。

夕食こそバラバラだが朝食は千冬先生がわざわざ誘いに来てくれるるので、俺、千冬先生、一夏君の3人で教員寮の食堂を使つてている。千冬先生が寮監室に止まりこんだときなどもわざわざ戻つて誘いに来るのが大変ではないのだろうか？

酢豚をレンジで温めながらジャージへと着替へる。
冷凍庫から「」飯を取り出して酢豚に続き温める。
茶碗に「」飯を移し、頂きますと挨拶。
うん、うまい。

俺の食事を見ながら一夏君が何かを考え込んでいた。

「一夏君どうした？ において腹が減つてきたか？」

「いえ、そうこつわけでないんですが」

一 夏君は普段夕食を軽くしかとらない。酢豚のにおいて食欲が刺激されたのかと思つたが違つたようだ。

「なにか悩みがあるのかい?」

俺は食事をとりながら一夏君の話を聞いていた。
一夏君の話を要約するとこうなる。

「さつきの中国から来たという代表候補生が一夏君の幼馴染だつたらしく。

2放課後のIS操作練習にその子のことを誘った。

4練習の後、昔の約束の話をしたらひっぱたかれた。
ところどころしごとつた。

「え、と、凰さんだつたけ？　彼女とどんな約束をしたのか聞いてもいいかな？」

怒った理由はどう考へても約束の内容にある。
きちんと覚えていなかつたとかそういう話ぢやないだらうか?

「酢豚をおいしくてくれるって約束です」

だから酢豚を見ながら考え込んでいたのか。

普通に再会を約束しただけのような気がするが……

「第からば馬に蹴られて死なんて言われるし、なんだつたんだ
「馬に蹴られて死ね？」

といひことは恋愛沙汰か。言われてみれば年頃の女の子が他人を
叩くなんて身体の成長のことか恋愛に關してぐらいかもしけないな。

「一夏君、もう一度約束がどんなものだつたか教えてくれ
「ですから酢豚を」

「いや、覚えている範囲で一言一句丁寧に頼む」

「えつと、それなら『料理が上達したら、毎日酢豚をおいひてあげ
る』だつたと思ひますけど」

重要なところが抜けてるよ一夏君。料理が上達したらとか、毎日
とかそこが重要だと思つんだ俺は。

「本当においひてあげるだつた？ 毎日食べさせてあげるとかじや
なく？」

「あへ、言われてみればそんな氣もしますね」

つまりは味噌汁をうんぬんって話なんだろう。

だけどそれは普通男が「味噌汁をつくってくれ」って言つもんじ
やないのか？

そもそも味噌汁を酢豚に変えてしまつのは無茶がないか？

「俺の予想だけど食べさせてくれるとかそんなニコアンスだつたん
じやないか？ 日本語つてニコアンス大事だし」

「ですけど、その程度で叩かれますかね？」

「そこは俺からば句とも言えない。自分で考えて答えを出す」とだ

その答えを語るのはさすがにためらわれた。

結局、一夏君の語り約束といつのは中学生のつよつと背伸びした

告白だったのだろう。

それを一夏君が字面のまま解釈してしまったのが原因だと……

年頃の夢見る乙女にとってそれはかなり残酷な勘違いだっただろ

う。

凰さんも無茶な改変をしたから完全に一夏君が悪いとは言えない
氣もするが……

「約束を勘違いしていく悪かつたと謝れば許してくれんんじゃない
か？」

「それで許してくれますかね」

「駄目だつたら駄目だつたときを考える。まずはやつてみると」とだ

翌日一夏君は朝一番で凰さんに謝りにいった。

後で聞いた話だが途中までは許してくれていたそつだ。

一夏君の不用意な発言の直前までは……

よつにもよつて

「食べさせてくれるとお「いつてくれるつじどつ違つんだ？」

なんて本人に聞いてしまつたらし。

一夏君……

謝るときは謝る意志以外のことであまつしゃべるべきではないの
だよ……

その日張り出されたクラス対抗戦日程表

一回戦は1組対2組

絶賛喧嘩中の二人の激突だった。

第1-1話 口常とい酢豚（後書き）

セカン党の方申し訳ない。

登場シーンをカットさせていただきました。

あの喧嘩を第三者視点で見たらこんな感じかなつと。

アルと鈴をどう絡めるかと考えたら絡めにくいことがわかつたのでこんな感じに……

シャルと絡めるとも考えましたがなんとなくしつくつこなかつたのでこんな感じに。

ちなみにはじめのセリフは本来寮でのセリフですが一夏の同棲話がなかつた代わりに繰り上がつて約束の話が出ました。

次回はクラス対抗戦です。

多分鈴音は次の話が終わつたら第3巻相当までは出番が……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3579v/>

IS 福音のコア

2011年11月8日08時54分発行